第14回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト
入賞作品集

平成 30 年 12 月 2 日　表彰式
於　國學院大學

國學院大學
高校生新聞社

巻　頭　言

学長　赤　井　益　久

「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」は、今回で14回目を迎えます。全国の高等学校の間で定着し、高い評価をいただくようになりました。今回も過去とくらべて遜色のない力作を多数お寄せいただきました。主催校を代表して応募された方々、ご指導を頂きました先生方に厚く御礼申し上げます。また、数多くの応募作を厳正に審査して下さった審査員の先生方にもご協力を感謝申し上げます。

日本の社会は、近代国家の特徴としてその社会構造が、急速な少子高齢化社会に突入し、経済や社会活動自体もその影響を受けるようになっています。つまり、大家族が普通だった時代から、核家族化へとすすみ、ついには一人住まいの形態も珍しくなくなりました。社会を形成する一つのまとまりである家族の在り方が大きく変化しています。その家族を取り巻く社会環境も、大きく変わりつつあります。われわれの幼い頃の記憶にある里山や森との共生、地域共同体とも言うべき町村の住人が参加していたお祭り、親戚同様の隣近所の付き合い、屋外での遊び、長老や祖父母の温容と共に記憶にある伝承、その貴重な姿が次第に薄れていく感じがしています。

同時に、平準化しているように見える日本全国の生活基盤においても、なお地域の特色や個性を有し、その地域の不可欠の要素として、むしろ積極的にその伝承文化を守り伝えていかなければならない意識が強まっているようにも見えます。それは古き良きものへの憧憬や懐古という意味だけではなく、むしろ地中深く根付いた芽から吹き出る新たなる花のように思われます。われわれは過去に遡って生きていくわけにはいきません。しかし、過去に学びつつ、これからを生きなければ将来を有意義に過ごせません。

変わることによる得られる永続性、永続することによって不変を意識できるのかもしれません。応募された方々の作品や研究を拝見して、それぞれの地域に生きる伝承文化の大切さを痛感した次第です。

國學院大學は、大学の使命として「伝統と創造」「個性と共生」「地域性と国際性」におけるそれぞれの調和を掲げています。文学と民俗に新たな地平を開いた折口信夫、神道考古学を開拓した大場磐雄、考古学と民俗学を融合した樋口清之などの学者を輩出しています。皆さんの中から、大学に進み伝承文化を培った歴史や文学、考古学などを深めてみたいという方々が誕生することを大いに期待しています。

最後に、コンテスト開催にあたり、ご後援･ご協賛いただきました文部科学省、農林水産省、全国高等学校長協会、全国高等学校文化連盟、國學院大學若木育成会、國學院大學院友会、國學院大學北海道短期大学部及び関係各位に心より感謝申し上げます。

目　次

巻頭言		國學院大學　学長　赤井　益久	
総評		國學院大學　教授　小川　直之	1
地域文化研究部門（団体）	最優秀賞・折口信夫賞	宮地集落の民俗誌　－石川県鳳珠郡能登町　春蘭の里－ 富山県立砺波高等学校　２年文系・歴史民俗班	3
	優 秀 賞	広めよう！みゃーくふっと先人の郷土文化 沖縄県立宮古総合実業高等学校　生活福祉科	4
	優 秀 賞	平成最後の“祖父江の虫送り”　～杏和高校　繋がりを求めて～ 愛知県立杏和高等学校　地域研究グループ	5
	佳　　作	2020東京大会に向けて全国・全世界に発信したい三島－沼津間6.6kmの道 静岡県立沼津城北高等学校　情報メディア部	6
	佳　　作	自分たちの足元をみつめる　～我が家のお雑煮から“今”を考える～ 愛知県立杏和高等学校　旧２年３組お雑煮調べ隊	7
地域文化研究部門（個人）	最優秀賞	漬物で語る　～『知らない』と『忘れる』に立ち向かう人々～ 愛知県立杏和高等学校　飯田　真世	8
	優 秀 賞	福井県敦賀市の伝統行事、「敦賀まつり」について 東京・広尾学園高等学校　荒殿　一花	9
	優 秀 賞	変化していく音頭　～音頭から始まる流行音楽のかたち～ 愛媛・済美平成中等教育学校　武井　千夏	10
	佳　　作	関西弁は日本語習得の良いツールとなりえるのか　～外国人の第二言語習得からみた関西弁～ 東京・渋谷教育学園渋谷高等学校　弓場　鈴響	11
	佳　　作	報恩の民『台湾少年工』は日本統治時代における犠牲者でしかないのか 神奈川県立横浜国際高等学校　矢川　優里	12
地域文化研究部門選評		國學院大學　教授　新谷　尚紀	13
		国立歴史民俗博物館　名誉教授　常光　徹	16
地域民話研究部門（団体）	優 秀 賞	おたちきさん　～なぜ、五百年以上祀られ続けてきたのか？～ 愛媛県立西条高等学校　地域・歴史研究部	18
	優 秀 賞	民間に根付く妖狐妖狸伝 群馬・高崎商科大学附属高等学校　社会部特選・特進男子	19
	優 秀 賞	「あくねの なな 不思議なおかし」　～阿久根の七不思議を調べて～ 鹿児島県立鶴翔高等学校　郷土芸能同好会	20
	佳　　作	高尾山の天狗伝説 東京･共立女子第二高等学校／神奈川･桐蔭学園高等学校　高尾研究会	21
	佳　　作	衛門三郎伝説 愛媛県立東温高等学校　郷土芸能部	22

地域民話研究部門（個人）	最優秀賞	「鬼」考　～今昔物語集と民話における～ 東京・世田谷学園高等学校　大和田　一稀	23
	優 秀 賞	河口湖天上山に伝わる『カチカチ山伝説』の真相 ～カチカチ山伝説の発祥地は本当に天上山なのか?～ 山梨県立吉田高等学校　廣瀬　香奈	24
	優 秀 賞	澤様と人々の思い 愛知県立杏和高等学校　木村　心優	25
	佳　　作	六合物語　～これを語りて柳田國男を戦慄せしめよ～ 高崎市立高崎経済大学附属高等学校　小杉　恒太	26
	佳　　作	箱根における九頭龍伝説 神奈川・鎌倉女子大学高等部　石田　瑠奈	27
地域民話研究部門選評		國學院大學　教授　花部　英雄	28
学校活動部門	優 秀 賞	妖怪「地域興し」　～山城の妖怪を活かした観光地づくり～ 徳島県立池田高等学校　探究科	31
	優 秀 賞	白文鳥の町弥富を再び　～弥富文鳥文化復活を目指して～ 愛知県立佐屋高等学校　文鳥プロジェクト	32
学校活動部門選評		國學院大學　教授　高橋　大助	33
		國學院大學　准教授　飯倉　義之	33
第 14 回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト受賞者一覧			34
後記			

第14回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト総評

國學院大學教授　　小川　直之

なぜ「地域の伝承文化」なのか

平成30年度で14回目を迎えた「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」の趣旨は、高校生が、居住する地域あるいは通学する高等学校の所在地域などで継承されている「伝承文化」に、自主的に目を向けて課題を決め、その内容を実地に調べたり、体験的に学んだりし、その結果をリポートとしてまとめる。これによって地域文化の実態とその存在の意味を捉え、地域文化の今後のあり方を考える。そして、その成果を評価し顕彰することで、こうした取り組みの質を高め、活発化することにある。

日本社会は、アジア・太平洋戦争後の高度経済成長とその後の経済活動などによって大きく変貌した。経済的に豊かになって生活様式が変わり、それまで受け継いできた地域文化のあり方も変化を余儀なくされていった。電化製品や自動車が家々に行き渡ったが、一方では農山漁村の過疎化と都市への人口集中が始まった。このコンテストでは「地域民話研究部門」を設けているが、夜に家のイロリ端で年寄りが子どもたちに「昔話」を語って聴かせることは、この時代に急速に衰退してしまった。さらにその後には、平均寿命が伸びる反面、出生率が低下するという少子高齢化が進み、平成30年の新生児数は100万人を下回った。

進行中の少子高齢化は、今までとは異なったさまざまな課題を生んでいる。そのうちの一つが、とくに農山漁村の人口減少で、地域社会の存続自体が困難になっているところもある。たとえば宮崎県椎葉村は、かつては1万2000人ほどの人口があったが、現在は3000人程度に減少し、村内のある集落は家数が約10軒となっている。この集落には11月下旬に夜を徹しての神楽が伝えられ、現在は16人で続けているが、このうち集落居住者は6人で、ほかの10人は東京や宮崎などに住む出身者が祭りの時に戻って神楽を行っている。また、京都の祇園祭など大都市の祭りも地域住民だけでこれを行うのが困難になっている。

地域の伝承文化を継承することは、人口減が顕著な農山漁村だけでなく、人口過密な都市社会も同じような課題を抱えているのである。こうした状況に対して、各地で実情にあわせた取り組みが行われていて、國學院大學の「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」もその一つといえる。高校生たちに「地域の根生いの文化」に目を向けてもらいたいという目的で始めたこのコンテストは、開始から十数年経って、さらにその重みが増しているのである。

それぞれの地域の個性といえる伝承文化にとって、もっとも大切なことは、この文化を誰が支えて未来に継承するかということで、コンテストに応募した高校生の一人でも多くが、こうした現実を見つめ、考え、文化継承に向けた活動をして欲しいということである。

なぜ國學院大學が「地域の伝承文化」に目を向けるのか

「地域の伝承文化」は、食べものなどの生活様式、行事や祭り・芸能、伝説や昔話、言葉などとして受け継がれている。これらに目を向けて初めて研究対象としたのは、柳田國男や折口信夫らであった。柳田と折口は、それまで文献や古記録に頼っていた文化や歴史研究に限界があることを認識し、民間伝承を中心とする文化・歴史研究を立ち上げた。その活動は明治時代末に始まり、昭和初期には現在の「民俗学」と礎となった民間伝承研究の体系が示されている。「地域の伝承文化」は、まさに「地域の民俗文化」で、折口信夫はこうした文化を「生活の古典」と名付けている。

國學院大學は、かつて柳田國男や折口信夫が教授を務めた大学で、卒業生には多くの民俗研究者、地域文化研究者がいるし、現在、文学部日本文学科と大学院文学研究科文学専攻には「伝承文学コース」が設けられている。名称は伝承文学であるが、実質は民俗学のコースで、先人からの学統を受け継いでいる。このコンテストの最上位の賞に「折口信夫賞」があるのは、こうした理由である。

國學院大學は、このような学問伝統をもつ民俗学の拠点校であることに加え、高校生たちの教科外の地域研究、地域文化の再評価にも寄与したいと考えている。大学が行う社会貢献の活動として地域の伝承文化に特化した取り組みは、他大学には例のない活動である。

「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストの概要と応募状況

このコンテストは國學院大学と高校生新聞社が主催し、農林水産省・文部科学省・全国高等学校文化連盟などの後援により実施されている。第１回から今回の第 14 回までの応募状況は表のようになる。第 14 回となる平成 30 年度は、表からわかるように今までで最高の応募数であった。応募は全国にわたっていて、個人活動の成果だけではなく、高等学校によっては生徒の夏休み中の地域研究と位置づけたり、部活動などの活動として取り組まれたりしている。

第１回から 14 回までの応募状況

回	年　　度	応募件数	応募校数
第１回	平成 17 年	133 件	33 校
第２回	平成 18 年	244 件	30 校
第３回	平成 19 年	85 件	38 校
第４回	平成 20 年	153 件	38 校
第５回	平成 21 年	417 件	36 校
第６回	平成 22 年	474 件	41 校
第７回	平成 23 年	318 件	45 校
第８回	平成 24 年	650 件	36 校
第９回	平成 25 年	538 件	35 校
第 10 回	平成 26 年	620 件	45 校
第 11 回	平成 27 年	640 件	47 校
第 12 回	平成 28 年	628 件	57 校
第 13 回	平成 29 年	709 件	57 校
第 14 回	平成 30 年	728 件	62 校

募集部門は第 13 回と同じく、内容を祭・伝統行事・郷土料理・方言などの「地域文化研究部門」、昔話・伝説など民話の「地域民話研究部門」、学校や学内の部活などによる組織的な取り組みをシステムとして構築し、教科教育とは異なる特色ある成果をあげている「学校活動部門」の３部門である。「地域文化研究部門」「地域民話研究部門」では、団体･個人別に最優秀（1)･優秀（2)・佳作（2)・入選（5）の各賞（括弧内は対象数）を選定し、各部門最優秀賞の中から１点を「折口信夫賞」としている。「学校活動部門」では、すぐれた取り組みと成果による優秀学校賞（２）を設けている。

第 14 回コンテストは、７月２日から公募を始め、９月 11 日（必着）に締め切り、全国の 62 校から総数として 728 件の応募があった。作品応募は、「地域文化研究部門」は団体 36 件・個人 449 件、「地域民話研究部門」は団体 36 件・個人 195 件、「学校活動部門」12 件であった。

地域研究の方法と評価基準

このコンテストの趣旨は前述した通りで、まずは、高校生が地域の文化や歴史に目を向け､その中から｢伝承文化」を発見することが重要である。そして課題を明確にし､これについて自らが調査研究を行うことで、その実態と問題点を見出して考察すること、さらに収集した情報や資料をまとめ、論理立てを行った結果をまとめることにある。

評価は先にあげた賞に基づくが、独自性と内容をもっとも重視し､一定のレベルに達していない場合は、最優秀賞を出していない。地域の伝承文化の現場に赴き、自分で課題とした文化を見聞きしているかが第一の選考基準である。インターネットなどウエッブからは手軽に地域文化情報を入手できるが、そのコピー＆ペーストをした作品は、最初にふるい落としている。ウエッブ情報はあくまで検索段階のもので、自らが地域の伝承文化の現場に足を運び、これを担っている方々と交流を行いながら、オリジナルのリポートをまとめなければならない。

自らの目や耳で対象と向き合った調査とそのまとめの過程で、何を考え、どのような結論を得ることができ、さらに新たにどのような問題が発見できているかが、審査の要点となる。地域の伝承文化を他者として対象化し、そのありさまを捉え、分析するという態度だけでなく、地域の伝承文化を体験的に学び、自己のものとするという態度での研究についても、このコンテストでは積極的に評価している。

学校部門賞では、組織的な取り組みによって、これを行った生徒たちの地域に対する見方がこのように変化したとか、課題に取り組むことによって生徒たちの共同や連携のあり方がどのように変わったなど、取り組みに対する自己評価が重要となる。この部門については､こうした意図の理解度がまだ低いのが残念だが、組織的な取り組みと成果の独自性を重視した。

各部門の選評は別途記されるので、ここでは折口信夫賞に触れておくと、富山県立砺波高等学校「宮地集落の民俗誌」は、事前の資料調査、実地調査、そしてこれらに基づくまとめと、出色のリポートであった。約半年でここまで調査とまとめを行い、不十分な面もあるが地域の民俗について的確に把握できていることを評価した。このコンテストへの応募作品として、十二分にモデルとなり得るものであった。

最優秀賞
折口信夫賞

地域文化研究部門（団体）

宮地集落の民俗誌
－石川県鳳珠郡能登町　春蘭の里－

富山・富山県立砺波高等学校
２年文系・歴史民俗班
（今多涼也、水上亮輔、越後菜月、佐伯南奈）

応募の動機

私たちが能登での地域調査で学んだことを形として残すために民俗誌（調査報告書）を作製することになり、「能登地域の素晴らしい文化を知ってもらいたい！」、「日本の過疎地域がどのような現状にあり、そこの人々がどのような思いをしているか多くの人に知ってほしい」との思いから、今回のコンテストの応募に至りました。

研究レポート内容紹介

私たちの高校では、毎年夏、２年生の理系コースは隣県の石川県・能登の臨海部へ行き、２泊３日の海の生物を調べる「臨海実習」という行事があります。しかし、文系コースにはそのような現地に赴いて調査をするという行事はありませんでした。そこで今年、「文系コースにも、同時期に２泊３日の現地で課題研究を行う機会を！」ということで、新しく文系コースにも地域調査が計画され、石川県鳳珠郡能登町「春蘭の里」の一集落、宮地集落で実施されました。

担当する調査項目の資料を読み込みながら質問事項づくり

１．事前学習（調査項目の設定・質問票作成）

まず私たちは能登町・宮地集落で調べる調査項目を４人で検討し、分担を決めました。そして現地調査を行う上で、限られた期間の中で、現地の方々からスムーズに情報を聞き取る必要性から、現地調査を行う前に事前に宮地集落について調べておくことにしました。主に「能都町史」という合併前の能登町の郷土史資料を、各自が担当する項目ごとに読み込みました。その後、町史を読んで疑問や興味を持ったことを、項目ごとに現地の方に質問する内容を記した質問票を作成し、地域調査当日に備えました。

班全員での聞き取り調査

２．現地調査（聞き取り調査）

事前準備で調べたことをもとに、宮地集落で聞き取り調査を行いました。地名・年中行事・住まい・食生活など９つの調査項目を、全員で調べるもの、２人組となって調べるもの、個人で調べるものの３つのやり方で調べました。そしてそれぞれの項目を調べるのに適していると思われる住人の方の家を訪れたり、直接私たちが宿泊する所に来ていただいたりして聞き取り調査を行いました。その結果、宮地集落は昔から伝わる伝統行事や伝承文化が今も残ってはいるが、問題点も多々あるということがわかりました。

地図の作成や座談会の録音編集

３．事後学習・座談会・まとめ（調査報告書作成）

現地調査で調査項目ごとに聞き取ったことや、それぞれの項目ごとの問題点を互いに共有する座談会を行いました。問題点としては何においても過疎と少子高齢化のため、文化の担い手となる若い人材が圧倒的に足りないということがあげられました。そしてその内容を踏まえつつ、民俗誌の原稿を書きはじめました。その後、再び座談会を開き、原稿の進捗やその集落が抱える問題点について互いに意見を深めあったりし、４人が協力して原稿を書き終え、メンバーで最終確認を行い『宮地集落の民俗誌（調査報告書）』としてまとめ上げました。

今後の課題

今回の能登町・宮地集落での現地調査から、過疎に悩む地域では「伝統文化の消滅」と戦わなければならないという厳しい現状にあることがわかりました。しかし、その地域の人々が「文化を消滅させてなるものか」と修学旅行生や外国人観光客を呼び込んだり、クラウドファンディングを行って古民家の再生を図ったりと熱意ある活動を続けています。そしてその活動を中心となって行っているのが若者ではなくご年配の方々なのです。

今回の地域調査を通して、「地域の伝承文化」を見つめ直すことがどれほど大切かを痛感しました。

受賞をきっかけに、これまで以上に地域文化の研究に取り組みたいと思います。

優秀賞

地域文化研究部門（団体）

広めよう！みゃーくふっと先人の郷土文化

沖縄県立宮古総合実業高等学校
生活福祉科
（下地笑弥華、石嶺花鈴、具志堅未玲、根間優奈）

応募の動機

平成21年ユネスコにより発表された日本の消滅の危機にある八つの言語の中に、私たちの住む宮古諸島の諸方言「みゃーくふつ（宮古口、宮古語）」が含まれています。私たちは、これまで交流のある来間島で、みゃーくふつのうちの一つである来間方言について学び、記録してきました。若い世代ではもうこの方言を使うことは難しくなっていますが、高齢者の方言の会話の中には、生き生きとした先人の知恵が含まれていると気づき、研究活動を進めてきました。その中で知ることのできた素晴らしい郷土文化を次の世代に伝承したいと思ったことが、応募のきっかけです。

研究レポート内容紹介

私たちは宮古の諸方言が絶滅の危機と知り、交流を深めている来間島で、次の１～４の活動を行いました。

１　来間方言の動画と会話集の作成

農業の学科である生活福祉科の活動にかかわりのあるテーマ「在来種の豆について」「井戸の話」「味噌の作り方・麦麹の起こし方」の三つについて、方言での会話をビデオと録音機で収録しました。方言のわかる方々の協力のもと標準語に訳し、書き起こしと訳を表示した動画を作成しました。また、来間島に観光などで来た方が方言で話してみたいと思えるように生の音声を録音した会話集の作成も行いました。これらは、宮古方言の記録のためのホームページ（URL:http://miyakogo.ryukyu ）で一部公開されています。

２　先人の知恵から学ぶ味噌作りの実践

私たちは、交流を重ねていくうちに、昔からある伝統的な味噌の存在を知りました。味噌の作り方を習得するために在来種の麦・下大豆の栽培と収穫、麦麹の起こし方､味噌づくりを､あらかじめ方言で録音･記録したデータをもとに実践してみました。材料から味噌をつくることは難しいものでしたが、昔の味噌の価値に気づくことができ､その活用法なども検討することができました。

高齢者に味噌作りを習う私たち

３　先人の知恵と方言を子供たちに伝える紙芝居の作成

方言を取材していく中で、来間島のヤーマス御願という伝統的なお祭りが続けられている理由を伝える民話を、たくさんの高齢者から聞くことができました。私たちは来間島の民話と方言を子供たちに伝えるため『来間の人々を助けた三兄弟～神様が怒ったぞぉ～』という紙芝居を作成しました。

紙芝居表紙

４　来間島での交流会・成果発表

平成30年３月に来間島の集落にある公民館で島の方々と交流会を行いました。今までの交流の中で学んだことや、私たちの活動に協力してくださったことへの感謝の気持ちをスライド発表などで伝えることができました。そして、来間島の子どもたちに、作成した紙芝居を披露しました。同じ紙芝居を３回も飽きずに見てくれている姿を見て興味を持ってくれたと実感しました。また、私たちが作った味噌で、地域の方々と味噌玉を作り、即席味噌汁として試食してもらったところ、様々な意見をいただくことができました。これからも昔の味噌作りを再現できるよう地域の方と一緒に計画しています。

今後の課題

この活動を通して、私たちは、自分たちの生まれ育った宮古島のことを知らなかったことに気づきました。そして研究を進めていく中で、「次の世代に伝えていきたい」という島への気持ちが強くなりました。今後も引き続き、井戸の話について紙芝居を作る計画があります。方言で収録した話の内容をもとに、「おばあちゃんが孫に昔の生活を伝える」形式の話にしています。これから､50年以上前の生活風景を再現できるように調べながら、紙芝居の絵を作っていく予定です。私たちの卒業後もこの活動を後輩達に引き継ぎ、来間島の伝統文化・生活・方言などを紙芝居を通し多くの方に伝えるために活用してほしいと考えています。

優秀賞

地域文化研究部門（団体）

平成最後の“祖父江の虫送り”
～杏和高校　繋がりを求めて～

愛知県立杏和高等学校
地域研究グループ
（伊藤響、立松真実、木村美穂、早川侑那、澤井翔太、飯田真世、坂東壮一郎、蓑島千東、大島将義、山口唯月、加藤亜矢、沢田茉優、黒田航輝、東莉玖、寺澤史貴）

応募の動機

昨年に引き続き文献調査や類似行事の参加により、新たな発見がありました。虫送りの魅力を知ってもらえるような活動を総合的な時間などを使って行いました。また、「地域行事を私たちがどう引き継いでいくか」、「虫送りを広めるために何をしたらいいか」を考え、『つながり』をテーマにし、まとめました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

愛知県無形民俗文化財である祖父江の虫送りに関する活動を行ってきました。江戸時代から続く伝統行事で、祖父江の虫送りでは実盛人形と松明を使い、実盛人形を炎の中に投げ入れ昇天させることで豊作を祈ります。今回は、３年生 14 人が主に活動に関わりました。以下が活動内容です。

１）祖父江の虫送りの昨年との比較

虫送りは、実盛人形と松明作りを行う一部と虫送りを行う二部とに分かれます。今年は虫送りが行われてきたなかで初めての雨が降ったため、一日ではなく二日で行われました。

一日目、昨年よりも小中学生の参加人数が増えていました。少し活気が出てきて、地域の方々も嬉しそうでした。高校生と小学生が遊ぶなど学生同士のつながりも見られました。

二日目、一日目よりも人数は減りましたが、体格の良い高校生は太鼓を持たせてもらいました。貴重な体験ができ、松明が成す炎の行列は昨年よりも長くなっていました。地域の方や他学年との新たなつながりができたと思います。

２）民俗学的調査

文献を調べるにあたり、「平家物語」と「柳田国男全集」を活用しました。

現地調査を行った稲沢市矢合の新田地区の虫祭りでは、現代のニーズに合わせて行われていました。御幣のみを使い、北班と南班で違いが出ていて面白かったです。また、もう一つの「尾張の虫送り」である常滑市矢田の虫送りを調査しました。矢田では、縦のつながりを活かし行われていました。そのため、松明の本数や長さ、参加人数の差が著しく大きいといえます。子供の参加人数が多いことによって、活気がありました。これと比較することで祖父江の虫送りの在り方の特徴も見えてきました。

地域の伝統行事だからこそ、その地域のつながりを直接体感することができました。地域の方の行事に対する思いが聞ける貴重な時間でした。

昇天する実盛人形

３）情報発信

民族調査だけでなく、みんなで話し合った結果、虫送りの魅力を活かそうとSNS を利用して情報発信を行い地域活性化に取り組みました。

ツイートの内容は、

① 行事そのものを知ってもらうもの　② 昨年参加した時の感想
③ 斎藤実盛について　④ マンガ「さねもり君劇場」
⑤ 祖父江の虫送り豆知識　⑥ 雑感

個性があふれているものが多く、初めて虫送りを知った方にもわかりやすい内容となったと考えています。最初は試行錯誤を重ね大変なことも多かったですが、ネットを介して奈良の高校生と交流したり、茨城の大学院生が虫送り来てくれたりと多くのつながりができました。また、つながりそのものが何よりも大切なことであることにも気づくことができました。

今後の課題として、高齢者には SNS が利用しにくい点や系統だった説明には適していないことも明らかになりました。大学受験が終わったら虫送り専用のホームページを作りたいと考えています。また、チラシや小冊子『祖父江の虫送りAtoZ』を行事の数週間前に配り、宣伝効果を高めたいと思います。さらに今年度活動を行ってきたメンバーの大半が３年生のため、高校の後輩にこの取り組みをどう引き継いでいくかが大きな課題です。

実盛人形の前で

松明を持って行列

佳　作

地域文化研究部門（団体）

2020 東京大会に向けて全国・全世界に発信したい三島―沼津間 6.6 ㎞の道

静岡県立沼津城北高等学校
情報メディア部
（小塚岳飛、水川神吾、岩元彪太郎、柿島蒼良）

応募の動機

三島－沼津間 6.6 ㎞を静岡県初の民営電気鉄道伊豆箱根鉄道軌道線が走っていた事に興味を持ち、研究調査を始めたのだが、この伊豆箱根鉄道軌道線が走っていた道は、旧東海道であり、歴史、伝統、伝説・民話等の伝承文化、食文化、文学等に関することが数多くあることがわかり、これを多くの人たちに知ってもらいたいと思い応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

○研究内容

1　はじめに（テーマ設定理由）
2　伊豆箱根鉄道軌道線の現地調査
3　静岡県初の民営電気鉄道　伊豆箱根鉄道軌道線
4　三島－沼津間 6.6 ㎞の道の調査
5　まとめ（結論）
6　参考文献

現在の伊豆箱根鉄道駿豆線の広小路駅
伊豆箱根鉄道軌道線もこの駅からスタートした。駅舎は軌道線廃線当時と同じ場所にある。

千貫樋の流れ（東から西方向を見る）

対面石（清水町八幡　八幡神社境内にある）
源頼朝と義経が黄瀬川の陣で対面した時に座った石

今回の研究は、静岡県初の民営電気鉄道、伊豆箱根鉄道軌道線についてのことから始まったのだが、実際にその廃線跡を回ってみて、伊豆箱根鉄道軌道線が走っていた道が、旧東海道であり、歴史、伝統、伝説･民話等の伝承文化、食文化、文学等に関することが数多くあることがわかった。

そして、その内容が一つの研究テーマとして詳しく研究調査するべきものであることがわかった。今後私たちの部の活動として研究を行っていきたい。（具体的には、麹に関する食文化、沼津城と沼津兵学校に関すること、源頼朝に関すること、千貫樋に関係して今川氏・武田氏・北條氏の関係についてなど）

しかし、現在これらのことをこの地域の人がどれだけ知っているだろうか。ほとんど知らないのではないだろうか。こんなにも数多くあるのにとても残念に思った。ぜひ多くの人たちに知ってもらえるように、私たちはこの魅力ある道の情報を発信したいと考えた。

そのために、この地域の観光協会に協力をしていただけるようにお願いし、三島－沼津間のこの道の観光・ウォーキングマップを作成して、三島駅や沼津駅等の観光案内所に置いていただき、この魅力ある道をピーアールしたい。本当に知ってもらいたいので、できれば、見た人が実際にウォーキングしたくなるようなものを作成したい。

また、静岡県の東部・伊豆地域は 2020 年東京オリンピックの自転車競技が開催される。その自転車競技の応援や観戦のために多くの人が全国から訪れる。

その人たちにもこの道の魅力を発信したい。さらに､東京オリンピックであるので､世界から応援や観戦に人々が訪れる。その世界から来る人々にもこの道の魅力を発信したい。そのためには、英語版のウォーキングマップを作成する必要があるので、本校の英語の先生に協力していただき、英語版のウォーキングマップを完成させたい。

このように、今回の研究で私たちは、この道には多くの魅力があることがわかった。この道の魅力を、本当に地域の人々､2020 年東京大会（東京オリンピック）に向けて､静岡県東部地域を訪れる､全国･全世界の人々に知ってもらえるように、今後２年間様々な情報発信の取り組みを行い努力していきたいと考えている。

佳　作

地域文化研究部門（団体）

自分たちの足元をみつめる
～我が家のお雑煮から“今”を考える～

愛知県立杏和高等学校
旧２年３組お雑煮調べ隊
（澤井翔太、蓑島千東、東莉玖　など計 39 名）

応募の動機

私たちは、日本史の授業を通して様々な日本の文化や生活について学習してきました。当時の私たちのクラスには歴史好きな生徒が多く、担任の先生から「何か日本文化について調べてみないか」と提案がありました。私たちはぜひ何か調べたいと思い、日本文化の中で楽しく調べやすいものはないかを中心メンバーで話し合いました。その結果、正月はたいていの家で作っているお雑煮に家庭・地域による差があるか調べてみることになりました。

研究レポート内容紹介

主に行ったことは以下のことです。

１）我が家のお雑煮レポート

冬休みに１人１人が自分の家のお雑煮をレポートにして（お雑煮を家で作らない人は「我が家のお正月」をレポート）、比較を行いました。お雑煮は尾張西部のものが 19 と多かったのですが、新潟県、熊本県、滋賀県など、様々な県のものも少数ながら集まりました。比較したのは、地域による餅の種類、餅の処理（＝焼いてから煮るか、そのまま煮るか）、味付け、だし、具 の５つです。比較をして驚いたことは、尾張西部ではほとんど味付けが醤油なのに対して、滋賀県では白みそを使っていたり、尾張西部ではほとんどが、具が餅菜（正月菜）だけなのに対して、新潟県では他地域と比べ物にならないほど多くの具が入っていたことなどです。餅菜と小松菜があまりにも似ていたため、JA 愛知西の方に問い合わせたところ、正式には餅菜と小松菜は葉が生える位置などが違う葉物野菜であることがわかりました。現在では小松菜が餅菜として売られていることがあることも知りました。また、尾張西部のほとんどでは、だしがカツオ節なのに対して、熊本県ではスルメを使っていたり、新潟県では鶏ガラを使っているなど、だしでも各地域の特徴があることがわかりました。興味深いのは化学調味料を使う家庭が少なくなかったということです。これは昔にはない、現代ならではの傾向だと考えました。

愛知のお雑煮

愛知のお雑煮にはいる餅菜

２）追加調査

１）のあとに追加調査を行い、「将来もお雑煮を続けたいか」とクラスのメンバーに尋ねたところ、ほとんどの人が今後も続けたいと回答しました。ここから、お雑煮は将来も残っていく可能性が高いという結論となりました。

３）お雑煮に関する文献を読んで

クラスの数名で、正月やお雑煮に関する本を読んで調べました。正月やお雑煮が何を意味するのか私たちは考えたことがなかったので、驚くことばかりでした。「お雑煮は三が日に食べるもの」という認識が私たちの頭の中には色濃く存在していましたが、文献から三が日以外にも「４日から 10 日までの雑煮」など、時期によってことなるお雑煮があることを初めて知り、驚きました。また、昔は正月でみんな１歳ずつ年をとる「お年取り」という考え方が存在することは、私たちにとって衝撃的でした。正月に餅を食べることで「命の更新」をして、次の１年を生き抜くエネルギーを蓄えるという記述もあり、興味深いものでした。

さらにお雑煮を食べることが、神様から力を受け取るための儀式的な一面を持っていることや、正月に餅を一切食べない「餅なし正月」という風習が一部の地域に存在しているということも知ることができ、正月とお雑煮に人々の深い想いが込められていることを実感しました。

今後の課題

今回の比較では、正月に自分たちが食べるお雑煮について調べましたが、30 名ほどのクラスだけでも、色々な違いを発見することができました。この企画をきっかけにお雑煮を初めて作った仲間が何人もいたので、このことも文化を知るうえでよかったことだと思います。今回調べたことから新たな意見を示すことはできませんでしたが、正月やお雑煮について多くの知識を学び、考えることができたので、今まで何気なく過ごしていた正月がさらに魅力的なものとして目の前に現れ、新鮮な気持ちで過ごせるのではないかと感じました。さらには正月の象徴ともいえる餅を食べない地域があることも知り、私たちが当たり前だと思っていた「正月」が、必ずしも全国の当たり前ではないという事実にも気づくことができました。これを機に、様々な地域のお雑煮や正月の違いについて調べてみたいと思いました。今後の課題としては、今回は１つのクラス内で比較を行いましたが、学年などのもう少し視野（範囲）を広げてより多くのレポートを集めて比較をすれば、さらに地域ごとのお雑煮の違いについて考えを深められたと思います。今後も多くの人にお雑煮について話を伺い、私たちなりの考えを深めていきたいと考えています。

クラスのメンバーで互いの家のお雑煮や正月を知り、共有することができたのは、自分が知らない他の地域や自分の住む地域に目を向けるきっかけとなる本当に良い経験でした。ありがとうございました。

最優秀賞

地域文化研究部門（個人）

漬物で語る
～『知らない』と『忘れる』に立ち向かう人々～

愛知県立杏和高等学校　３年
飯　田　真　世

応募の動機

昨年私は「漬物は語る～世界に誇る日本食の起源とは～」を書き、同コンテストで優秀賞を受賞しました。そこで、民俗学研究の楽しさと魅力を知ったとともに、最優秀賞に手が届かなかった悔しさを味わいました。そのため、さらなる漬物の魅力を知りたい気持ちとリベンジしたい気持ちが芽生え、研究の持続とコンテスト応募を決めました。前回の論文では文献資料の読み取りから漬物の歴史について学んだため、今回は聞き取り調査を中心に、漬物のこれからについて研究しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

１．香の物の漬けなおしとの出会い

昨年研究のために参加した香の物祭りで、敬神婦人結の会と書かれたテントの下で２種類の香の物をふるまっている場面に遭遇しました。話を聞くと、昨年香の物祭の漬け込み神事で漬けられた香の物のあまりと、漬けなおしをした香の物だといいます。そこではじめて、敬神婦人会結の会が行っている香の物の漬けなおしを知りました。そこに、香の物の今後が関わっているのではないかと感じた私は、研究の対象を香の物の漬けなおしに決めました。

２．敬神婦人結の会への聞き込み

香の物の漬けなおしについての研究をする上で、敬神婦人結の会の役員への聞き取り調査を行いました。漬けなおしを始めたきっかけは、香の物祭りの漬け込み神事で漬け込んだ野菜は熱田神宮に奉納されますが、その数が決まっており余りが出るからだそうです。元々、その余りは埋めていたそうですが、本当は熱田神宮の神様が口にする食べ物なのに埋めてしまっていいのか、もったいない、という思いがあったとのこと。しかし、漬け込み神事で一年間塩漬けされているため食べることはできません。そこで、香の物の漬けなおしが始まったそうです。その他聞き取り調査で以下のことを明らかにしました。

・活動を始めて５年目
・塩漬け１年後かかる年数は＋２年
・塩出し（水）約３日→粕漬け２回→本漬け（ザラメ）１回
・「藪に神の物」の香の物として食べていただけることに意味がある

聞き取り調査を通して、香の物の漬けなおしに関するお話を深く聞くことができました。その中で、香の物の歴史を繋ぎ伝えるため、努力を惜しまず戦い続ける様子が見えました。２年という長い時間をかけ、神様にお供えする香の物を氏子や参列者の口に届ける活動の本意は、やはり敬神の気持ちだということがわかりました。

漬け物を漬ける私

敬神婦人結の会の方と

３．２年目の香の物祭りへ

毎年８月 21 日に萱津神社にて香の物祭りは開催されます。今年も８月 21 日火曜日に盛大に開催され、本殿祭から漬け込み神事まで参加しました。わずか２度しか参加はしていませんが、その短い時間の中でも歴史が刻まれていく感覚を覚えました。

今後の課題

私は２年間香の物や萱津神社について研究をしました。今後の課題は、ここで終わらないことだと思います。今後も香の物祭りに参加し続け、自分の生まれ育った地域を思い考えることを怠らないようにしていきたいです。

優秀賞

地域文化研究部門（個人）

福井県敦賀市の伝統行事、「敦賀まつり」について

東京・広尾学園高等学校　２年
荒　殿　一　花

応募の動機

夏休みを利用し、お盆のお墓参りを兼ねて祖父の出身地である福井県敦賀市を訪ねた。その昔、敦賀市は港を埋め尽くすほど多くの船が行きかい、要衝として栄えた時代があったというが、今では過疎化しさびれてしまっていた。駅前の商店街の多くがシャッターを閉じたままで、人影はまばらであった。しかし、年に一度の「敦賀まつり」になると、大勢の人が集まり、町に活気を呼び戻すと聞き、資料館や図書館を訪れて調査を行った。

研究レポート内容紹介・今後の課題

「敦賀まつり」は、地元の由緒ある気比神宮（神社）の秋季例大祭が、敦賀市民の祭りとして継承されている祭りだ。毎年、９月２日から 15 日にかけて執り行われている例祭の中で、９月４日に開催される例大祭では、山車（「だし」と読まずに「やま」と読む）の巡行が最大の見所だという。

山車を展示している「みなとつるが山車会館」があるときき行ってみた。そこは、敦賀まつりで町を練り歩く現役の山車が６基すべて収納されていて、そのうちの３基が展示されていた。山車の大きさは高さ３メートル、飾り付けをすると８メートルになることもあると知って、その迫力に驚いた。実は 1945 年７月 12 日の空襲で敦賀市が壊滅的な打撃を受け、山車や神輿の大部分が焼けてしまい、今日存在する６基の山車の多くは平成になってから復元されたものだという。この大きな山車は、豪華な装飾で重量もかさみ、たくさんの人で曳かなければ動かないようなものだが、昔は多いときに 50 基も練り歩いていたと知り、再び驚いた。

敦賀まつりが由来する気比神宮を訪ねた。入り口には、日本三大鳥居に数えられる朱色の大鳥居が構え、歴史を感じた。敦賀市立図書館に行って調べたところ、『古事記』に登場する気比神宮の主祭神、伊奢沙別命（いさざわけのみこと）は大和朝廷と交わり、重視されていたという。その後も、遣唐使の廃止以降途絶えていた大陸との交流において栄えた敦賀の気比神宮の役割は、祭祀を務めるだけでなく、外交面でも、ともすれば軍事的にも重要だったという。中世になると「北陸道総鎮守」とも称され、北陸一帯に多くの社領を有していたが、戦国時代になると、織田信長の侵攻によって社殿のほとんどを消失し、著しく衰退。江戸時代になると、再興され、かつての繁栄は見られなくなったと言われるものの、その一方で、祭りの華やかさは盛大になったという。

気比神宮の大鳥居を訪ねて

敦賀の山車の起源は定かではないが、室町末期には成立していたそうだ。中世末期～近世初期にかけて敦賀湊（港）が最も栄え、海路で運ぶ様々な物品を取引する商人たちが大きな力を持ったことと、山車の発展は深い関係があるという。

『古事記』には、気比神宮の主祭神、伊奢沙別命は、食料や海の恵み、海の安全を守護する神、「御食津（みけつ）大神」という別名でも記されていたという。敦賀が往来の拠点としてだけでなく、天然の良港を有し、海産物朝貢地であったことも反映して、祭神が食物神としての性格をもつのだそうだ。そのせいもあってか、祭りは食べることと深く結びついていることに気づいた。例えば秋の例大祭での山車の曳出し順を決めるために行われていた「牛腸祭」についても、かつては料理の品数が 36 品目（1792 年の記録）や、29 品目（1851 年）にも及び、鯛を焼いたり、京都へたけのこや茄子などの食材を注文したり、饅頭などの土産も大量に用意するほど、多額な負担と細心の神経を払っていたという。（現在は形をかえて毎年６月 16 日に行われている。）

みなとつるが山車会館にて展示されていた山車

今後、調べきれなかった祭りと食についてを本格的に考察してみたいと考えている。当時盛大だった食文化が、今どのように継承されているか、変遷を具体的に調べたい。また、今回は敦賀まつりを見ることができなかったが、来年は実際に見に行き、より深く調査を行いたいと思っている。

敦賀市立博物館にて敦賀の歴史を調べる

優秀賞

地域文化研究部門（個人）

変化していく音頭
～音頭から始まる流行音楽のかたち～

愛媛・済美平成中等教育学校　４年
武　井　千　夏

応募の動機

私は小学生の頃、ダンスを習っていたということもあって歌やダンスに興味があり、よく音楽番組を見ていた。その時の出演者の話で海外の振付師の方に振付けてもらったというのを聞き、日本の文化の中でいわゆるダンスといわれるものは何かと考えた。すると、思い浮かんだのが「～音頭」、「盆踊り」というものであった。しかし、最近は音頭という言葉をあまり聞かなくなったように思える。だからこの論文をきっかけに音頭や盆踊りのことをもっとたくさんの人に知ってほしいと思った。その中で、このコンテストを担任の先生から教えていただき、音頭をより知ってもらえるきっかけになればと応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

「音頭」という言葉は、現在の日本では死語になりつつあるといわれている。まず、「音頭」という言葉の意味を調べてみると、音頭とは民族舞踊またはその歌のことであった。踊りと歌とが一体になったところに特徴があるようだ。また、音頭は古来から存在しているとも言われているが、そのルーツはいつごろまでさかのぼることができるだろうか。それは、なんと何千年も前にもさかのぼり「雅楽」にあるということである。当時は呼び方も違っており「オンドウ」とよばれていて、意味も各管楽器の首席奏者のことであった。また、現在も残っている音頭には、明治末期から昭和初期に流布したものが多く、その背景にはレコードが普及したことが大きいようであった。

愛媛県伊予郡松前町夏祭り

このように、音頭には「古い」などというイメージがつきやすいが、現在の日本でも結構使われている。なかでも代表的なものが「アニソン音頭」である。これにより、明治時代以前の伝承音頭とは全く切り離された形にはなったが、子供たちのなかでもよく話題になったりするなどして新たな進化を遂げている。また、日本のアニメが海外で注目されるようになり、戦時中の植民地支配などで昔から音頭が広がっていたアジアや南米だけでなく、日本文化が注目されるようになった地域、たとえばヨーロッパなどにも音頭が広がっていく可能性があるように思われる。

義農作兵衛像

今後の課題としては、音頭を世界中に広めるにはこれまでと異なる方法で広める必要があるように思える。その方法として考えられるのはやはりアニメを用いることである。これまで日本で音頭が広まるきっかけになったのは、オリンピックのような大きな国家的事業が関係している。たとえば、東京オリンピックで「東京五輪音頭」がヒットしたあとに、アニメの世界で「オバQ音頭」がヒットした。だから、2020年東京オリンピックの際に再度、アニメに音頭をのせて海外に伝えていくことが可能であるように思われる。

佳　作

地域文化研究部門（個人）

関西弁は日本語習得の良いツールとなりえるのか
～外国人の第二言語習得からみた関西弁～

東京・渋谷教育学園渋谷高等学校　２年
弓　場　鈴　響

応募の動機

私は関西で育った後東京に来たため、関西弁で考え、それを頭の中で標準語に翻訳していました。こういった脳内の変換経験が外国語の習得に役立たないかと思い、調べ始めたのが研究のスタートです。様々な文献を調べるうちに、そもそも２つの異なる言語として関西弁と標準語を捉え、言語を取得する方法についてより深く調べようと思いました。また外国語学習に耳からの情報も大きな役割を果たしていると知り、関西弁の独特なイントネーションやアクセントを生かして、外国人に効率的な学習を提供できないかと考えたことが、このテーマへ繋がっています。方言という地域文化の研究でもあったため、ここに応募しました。

研究レポート内容紹介

１．関西弁の特徴

関西弁の特徴の一つとして母音を明瞭に発音することがある。そのためローマ字で発音を学んだ外国人には聞き取りやすいといわれている。また関西弁のアクセントは高さのイントネーションが高くはじまる（高起式）か、低くはじまる（低起式）かと、高い音が低い音に変わる場所（アクセント核の位置）という二つの要素をもとに決まる。関西弁の高くはじまるｎ拍の単語には、いずれかの拍にアクセントの核がおかれるか、全く置かれないかのｎ＋１個のアクセント型、低くはじまるｎ拍の単語では、第一拍にアクセント核が来ないため (n+1)-1=n 個のバリエーションがある。この両者を足すと関西弁のｎ拍の単語は、2n ＋１個ものアクセント型のバリエーションを持ち合わせている。したがって関西弁は日本語学習における導入語として有効であるのではないかと考えた。

関西弁語彙や音声再現の検証資料

関西弁音声の検証結果について執筆中

２．留学生の関西弁再現

学生２人へのインタビューにより、「関西弁による授業経験の有無」、「関西弁への印象」、「関西弁の語彙力」を確認し、「ヒアリングした関西弁の理解及びイントネーションの再現」を検証した。２人とも現地の大学や独学で教科書を使って勉強したのち日本に留学し、標準語のアクセントを習得した。大学やテレビなどで関西弁を耳にする機会があるため、関西弁になじみがあり、一部の語彙は使えた。音源を再現する検証では、関西弁が特徴的なイントネーションであるため、聞いた直後は再現できた。

３．日本語学習における関西弁の有効性

関西弁の発音の特徴が日本語学習者に与える影響には、音の高低とアクセント核という二つの要素がある。中国語話者などに音の高低を理解しやすいというメリットを持つかもしれないが、標準語に比べて複雑で、規則的でない部分もあるため、難しくなりやすい。また現在日本では標準語で教えることになっていて、関西弁で日本語を教えることはないものの、関西弁に関する講義などは設置されている。

今後の課題

関西弁の母音優勢による聞き取りやすさや、標準語には存在しないアクセントの耳への残りやすさが日本語を学ぶ外国人にあることが分かった。しかし、現状日本語教育は基本的に標準語で行うことになっていて、関西弁をはじめとした方言の授業はあるものの、実際に関西弁で授業は行われていない。そして関西弁のアクセントの多様さを踏まえると、関西弁での日本語教育は難しいと思われる。

しかし、筆者自身は関西弁に対して持たれるフレンドリー・明るいといった印象は日常会話で有効になりえると考えている。引き続き、関西弁を利用した日本語学習の方法を模索していきたい。そして関西弁という方言に触れることによって、日本の良さを知ってもらうことができたらうれしく思う。

佳　作

地域文化研究部門（個人）

報恩の民『台湾少年工』は日本統治時代における犠牲者でしかないのか

神奈川県立横浜国際高等学校　３年
矢　川　優　里

応募の動機

大和市立中学校に進学した私は、同市教育委員会教育研究所編集『社会科副読本大和』を受け取った。大和・海老名・座間の三都市にまたがる地に移住し軍事工員として勤務した元台湾少年工：張振栄氏の回想録には、一部要約という但し書きが添えられ、当時の苦労や恐怖を綴った箇所だけが抜き出され掲載されている。在りし日の日本は、弾圧や略奪に満ちた独裁的統治しか行っていなかったのだろうか？地元自治体独自の社会科副読本が、次世代につなぐに相応しい副読本であるか否かを検証する必要がある。《台湾人を同胞として併合し共に発展しようとした日本》という視点で調査するとともに《統治された側から観る本音》の掘り下げを行う事にした。

研究レポート内容紹介

第１章．平和都市宣言と教育《多数決では何も決められない条例の危険性と副読本》

《日台の関係に間接的悪影響が及んでいく恐れがある》と思われる大和市独自の宣言、条例、並びに《自由裁量教育として許容される》教員指導用資料集と副読本の問題点を紹介。改善された箇所の経緯も説明した。

第２章．台湾史教科書認識台湾から読み解く少年工たちの歴史的背景

台湾初の自国史教科書である『認識台湾』の和訳本『台湾を知る』（蔡易達・永山英樹訳、2000 年発行書籍）から注目した箇所を、公的物証として活用した。

50 年もの間同胞であった台湾本省人と日本人は、1945 年９月２日以降別々の国に付随する民となり諸外国からの干渉を受け続ける曖昧な立場になった。その双方が政治的軋轢の中、どのような歴史的認識を表し変化させていったのだろうか。台湾との絆を固く信じ、台湾を台湾国として尊重する日本になるよう願う日本人の立場から、重要と思う箇所を抜き出し、比較検証を行った。

第３章．高座日台交流の会会長石川公弘氏の著書を介して知る台湾少年工の証言録

石川公弘氏が書かれた著書『二つの祖国を生きた台湾少年工』を、信憑性高く最も重要な参考文献として選出。著者自らのご意見をうかがう機会にも恵まれた。当研究における主軸として活用した石川氏の著書には、日本からの国交断絶や国民党による戒厳令を経た今尚、第二の祖国と慕い影に日向に寄り添いながら支えて下さる元少年工たちの体験が高い表現力で綴られている。元台湾総統：李登輝氏が述べた推薦の辞の一部と元少年工たちの手記を順次要約し紹介した。

高座海軍工廠跡を臨む 座間市芹沢公園内に建立されたばかりの《台湾少年工（海軍軍属）顕彰碑》
《二つの祖国を生きた台湾少年工》の著者：石川公弘氏に研究レポートの趣旨を説明して聞き込みを行った。

大和市が所蔵する《高座海軍工廠関係資料集》内に年端もいかない少年工当時の日記を見つけた。
日本を祖国同様に愛し守ろうとする純粋な気持ちが伝わりただひたすらにありがたいと思った。

今後の課題

台湾最大の知日団体 台湾少年工 同窓組織 台湾高座会の方々が、第二の故郷として格別の想いを寄せる地が大和市である。大和市の有志各位が 行政主導の姉妹都市交流化を願い働きかけてきたが、その都度、その願いは軽視されてきた。台湾人との交流政策案を頑なに退け続ける 大和市長 大木哲氏に対し、同じ高座の地であった綾瀬市・海老名市・座間市との連携で交流する計画案に切り替えて願ってもなお、大和市長だけが反対の姿勢を崩さない。疑問を払いきれない宣言や条例の存在 並びに 独裁的とも思える多大な市長裁量の数々に気がついた。

今後の課題としては、現実的かつ具体的なアプローチを実践していけるよう法学を身につけ 大和市を諦めない方々に学びたい。

地域文化研究部門選評

國學院大學教授　新谷　尚紀

■総評

高校生の皆さん、若い人たちの研究意欲には、実にたくさんの可能性が秘められています。①疑問を発する力、②調べる力、③分析して結論にまとめる力、その３つこそが貴重な研究の力です。これからもその３つをずっと大切にしてください。ただ、若者の素朴な意欲に対しては、よい指導基準が示されることが大事です。みなさんはその、よい指導基準を示していただける先生方に恵まれて、ほんとうによかったですね。

一般的に研究成果についての評価基準として共通しているのは、専門の研究者の場合でも同じなのですが、以下の５つの点です。１．問題発見や着想の上での独自性、２．情報収集の上での直接性や確実性、３．情報整理の上での論理的工夫や努力の跡、４．立論の手順における論理的実証性、５．結論としての新たな知見の明確性、です。このコンテストに参加した高校生のみなさんの場合もこれを基準として読んでみました。１．の問題発見については、入賞作のすべてが身近な問題発見から出発しており、高く評価できました。２．３．はやはり文献調査と歴史情報の確認を行なった上で実際の現地調査と現場情報のていねいな収集ができているかどうか、という点が重要です。文献調査と民俗調査との両立ができている場合は評価が高くなります。４．５．はハイレベルな要求ということになりますが、若い高校生のみなさんと、現場で指導しておられる先生方との熱意が感じられる応募作品が多かったと思います。これからも、上記の１．から５．の評価基準を参考にして、このような実際的な学問探求が若い人たちによって積み重ねられていくと、日本の学問の未来も大きく開けていくにちがいないと思います。

■団体の部

最優秀賞・折口信夫賞

「宮地集落の民俗誌　－石川県鳳珠郡能登町　春蘭の里－」

富山県立砺波高等学校

2年文系・歴史民俗班

能登の宮地集落を調査対象に選んでの民俗誌ですね。たいへんよく調査してあります。事前の準備もしっかりしてから現地に赴き、現地の人たちとのコミュニケーションもよくとれており、貴重な情報の収集もできています。たった４人なのに、先生の適切な指導のもとに、初心者とは思えないほどの質のよい民俗誌ができあがっています。きっと、この調査研究に取り組む前の４人と、この民俗誌を完成させたあとの４人は、人間としての幅と深みが大きく異なるほどに成長していることと思います。よいしごとをすると人はみんな変わるのです。評価される点をあげておけば、以下のとおりです。一、豊富な資料情報を収集して民俗誌というかたちに仕上げて完成させている点です。なかなかの努力がなければこのように仕上げることはできません。それを実現している点が高く評価されます。二、準備から実施、そしてその後の座談会や感想文まで、全体を記録しておいたことです。調査と実施の具体的な運びが次に続く人たちにも参考になるでしょう。三、地名、屋号、年中行事、人生儀礼、食生活、住まい、信仰、伝説とそれぞれを詳しく調査している点です。この経験を生かしてこれからもがんばってください。

優秀賞

「広めよう！みゃーくふっと先人の郷土文化」

沖縄県立宮古総合実業高等学校

生活福祉科

「みゃーくふっ」と言われる宮古島の方言を、とくに来間島で調査をしていますね。評価できる点は多いのですが、たとえば以下のような点です。一、方言の調査だけでなく、生活や生産の現場での言葉についての調査を試みているので、現場ごとの生きた貴重な資料が収集できている点、二、先人の知恵から学ぶという姿勢になっており、味噌作りの実践から先人の知恵や技能についても、貴重な情報が収集されている点、三、その先人の知恵や方言を子供たちに伝えるために、紙芝居を作るなどの工夫と努力をしている点、そして、調査地での交流会や成果の発表などで情報発信をして、しっかりと社会還元しているという点、などです。これからもがんばってください。

優秀賞

「平成最後の“祖父江の虫送り”　～杏和高校　繋がりを求めて～」

愛知県立杏和高等学校

地域研究グループ

この祖父江の虫送り行事については、五年目になる継続的な調査ですね。よくがんばりましたね。先輩がこれまで調べてきたこともよく学習して、それをふまえながら自分たちの手でしっかりと調査をしている点

がまずは評価できます。以下、評価できる点をあげておきます。一、集まった15人のほとんどが２年連続参加で、地域の人たちとのコミュニケーションがよくできていて、観察が詳しくなっていた点、二、連続参加の有利な点として､調査地点を増やしたことも含めて、昨年度と今年度との共通の部分とちがっていた部分とによく注目できている点、豊富な写真とリアルな現場体験がよく描きとどめられている点、三、しっかりと情報発信をしている点、などが評価されます。などです。これからもがんばってください。

佳作

「2020東京大会に向けて全国・全世界に発信したい三島ー沼津間6.6㎞の道」

静岡県立沼津城北高等学校

情報メディア部

地元の、伊豆箱根鉄道軌道線の歴史についてよく調べていますね。評価できる点は以下の通りです。一、沼津市博物館の紀要などをまず参考にして基礎情報を集め、その後実際に三島から沼津まで約6.6キロの軌道線跡を実際に回ってよく調査している点、二、明治29年（1896）の駿豆電気株式会社の創設から、明治39年（1906）の開業へ、そして大正時代の黄金期へ、しかし、戦後はバスとの競合に苦戦し、昭和36年（1961）６月の集中豪雨で黄瀬川橋の流失をへて昭和38年（1963）ついに、57年の幕を閉じるまでの歴史がよくたどられている点、三、軌道線が走っていたのは旧東海道であったことを知り、歴史的な史跡や寺社などの調査に広げている点、新旧の貴重な写真データを収集している点、などです。これからもがんばってください。

佳作

「自分たちの足元をみつめる　～我が家のお雑煮から“今”を考える～」

愛知県立杏和高等学校

旧2年3組お雑煮調べ隊

雑煮については日本各地でちがいがあり、よく話題になりますが、自分たちの足元から見つめてみようとしたのはよい着目です。評価できる点は以下の通りです。一、尾張西部の19事例、三河２事例、岐阜県１事例、三重県３事例、滋賀県１事例、さらには新潟県２事例、熊本県１事例まで集めて、丸餅か角餅か、焼くか焼かぬか、味噌か醤油か、鰹節などのだしの種類、具材のいろいろ、などが整理され比較されて表に示されている点、二、文化庁関連の図書や、粕谷浩子氏の著作などの参考文献を参考にしてよく情報整理している点、また民俗学関係の餅や雑煮についての参考文献からよく学んでいる点、三、具体的なクラスの生徒30人ほどの家の雑煮を写真と共にその情報をよく集めている点、などです。これからもがんばってください。

■個人の部

最優秀賞

「漬物で語る　～『知らない』と『忘れる』に立ち向かう人々～」

愛知県立杏和高等学校

飯田　真世

「漬物」についての身近な疑問から、しっかりと関連する情報を集めてよくまとめましたね。漬物はたしかに、日本の伝統的な食文化の中でも重要なものです。日本各地の漬物文化に関連する資料情報の収集と比較、そこから地理的な地域差や、歴史的な漬物の変遷史を明らかにしていくといいですね。これは一地域の追跡ながら貴重な研究でした。評価できる点をあげておきましょう。一､旧甚目寺町にある萱津神社の｢香の物祭り」を中心に、その祭りに参加しての調査情報をよく集めており、写真データなどで分かりやすく示している点、二、熱田神宮との関係まで聞き取りできており、印刷物ではあるがその関連資料も入手して歴史的な追跡も試みている点、三、萱津神社の宮司さんへの聞き取り調査情報も貴重で、また後半の部分に、関連する文献類やパンフレットなどの情報を数多く掲示して参考に供している点、などです。これからもがんばってください。

優秀賞

「福井県敦賀市の伝統行事､「敦賀まつり」について」

東京・広尾学園高等学校

荒殿　一花

自分の祖父の出身地である福井県敦賀市の「敦賀まつり」についての調査ですね。評価できる点は以下の通りです。一、敦賀まつりのルーツが、気比神宮の例祭にあることを記録類を調べてから現場感覚でよく記述している点、二、牛腸祭りとごちそうについて注目している点、三、新聞記事などをよく集めている点、山車いろいろとともに昭和初期の写真なども示している点、などです。これからも敦賀市の変化を追いながら、調査を進めて行くといいですね。

優秀賞

「変化していく音頭　～音頭から始まる流行音楽のかたち～」

愛媛・済美平成中等教育学校

武井　千夏

音頭と流行音楽の関係について追跡してみたものですね。評価できる点としては、以下の通りです。一、音頭の歴史と音頭のいろいろとをよく調べている点、二、とくに地元の松前音頭について、その音頭の特徴と、義農作兵衛の伝説や、おたたさんのことも追跡してしている点、三、アジアや南米までも音頭が広まっていることをよく調べている点、盆踊り唄とその他の音楽の種類と特徴について比較して、音頭では単旋律中心で、和音の使われない傾向などに注目している点、などです。これからもがんばってください。

佳作

「関西弁は日本語習得の良いツールとなりえるのか
～外国人の第二言語習得からみた関西弁～」

東京・渋谷教育学園渋谷高等学校

弓場　鈴響

あまり民俗学との関係は深くないような挑戦ですが、興味深いアプローチをしていますね。評価できる点としては以下の通りです。標準語と関西弁についてのいくつかの文献を読んで先行研究をふまえてから取り組もうとしている点、二、関西弁の特徴についてもよく整理して、インタビュー調査の組み立てもをよく準備している点、山下好孝『関西弁講義』を読んで著者に教えをうけているようですが、その姿勢もたいへんよいと思います。三、発音やイントネーションの比較から、外国人の日本語習得によいツールとなるかもしれない可能性を導き出している点、数は少ないけれども実際に外国人にインタビューして確かめようとしている点、などです。これからもがんばってください。

佳作

「報恩の民『台湾少年工』は日本統治時代における犠牲者でしかないのか」

神奈川県立横浜国際高等学校

矢川　優里

地元の、大和市関係の歴史教本から、台湾少年工の存在とその歴史を知り、しっかりと調べてみたものですね。評価できる点は以下の通りです。一、元台湾少年工の回想録をよく読んで、当時の技師の早川金次氏の活動に注目して、いくつもの大切な事実があったことを発見している点、二、『認識台湾』をはじめとする貴重な文献を読んで、日本統治時代の歴史をよく追跡しようとしている点、三、複雑な交流の現状についても、その歴史的な中での理解を求めようとしている点、関係者の手紙類などの史料にもよく注意して、複雑な歴史の動向について整理しようとしている点、などです、国際関係の複雑化の中でも平和へ向けた姿勢を大切にしていく上で、これからも調査や勉強がたいせつです。がんばってください。

地域文化研究部門選評

国立歴史民俗博物館　名誉教授　常光　徹

■総評

今回も充実した作品が揃いました。とくに、折口信夫賞に輝いた砺波高等学校の『宮地集落の民俗誌』は、事前の準備から現地調査、成果のまとめまで、四人の班員が議論を重ねながら作り上げた質の高い報告書です。民俗学の根底には、私たちの目の前の生活のあり方に対する関心や疑問が横たわっています。聞き書きなどの手法を用いて、歴史的な移り変わりの姿や、そこにこめられた人々の知と技、心意を明らかにしていくところに特徴があると思います。その意味で、常に身辺に生起する話題に関心をもつことが大切です。作品を読んでいて感ずるのは、先生方の指導のすばらしさです。とりわけ、団体の部は、テーマの設定から現地との連絡、調査方法や成果のまとめ方など、適切な指導なしには充実した作品に結実するのは難しいでしょう。改めて先生方のご指導に感謝申し上げます。

■団体の部

最優秀賞・折口信夫賞

「宮地集落の民俗誌　ー石川県鳳珠郡能登町　春蘭の里ー」
富山県立砺波高等学校
2年文系・歴史民俗班

四人の班員が協力してまとめた力作である。調査地に関する文献の収集や学習を重ねたうえで、調査項目の設定や役割分担を行うなど、周到な事前の準備が現地での聞き書きによく生かされている。伝統文化を踏まえた宮地集落の現在の生活が生き生きと伝わってくる内容で、地元の抱えている課題のいくつかもここから見えてくる。限られた調査期間のなかで、実にさまざまな情報を得ていることがわかるし、収集したデータを写真や図を駆使してわかりやすくまとめている点も評価される。

優秀賞

「広めよう！みゃーくふっと先人の郷土文化」
沖縄県立宮古総合実業高等学校
生活福祉科

宮古市来間島の方言のなかにこめられた生活の知恵に着目し、丁寧な聞き書きをもとに、地元の伝承文化の実態に迫る活動である。動画の作成・味噌づくり・紙芝居など具体的な実践活動を通して、先人が蓄積してきた生活の知恵と技を学んでいる。調査から得た成果は交流会の場を通して発表し、現在の人々の生活との関わりを模索している点が大切で、新たな展望が生まれている。添付資料の「井戸（カー）の話」は、生活の実感がよく表現されていて興味深い内容だった。

優秀賞

「平成最後の“祖父江の虫送り”　～杏和高校　繋がりを求めて～」
愛知県立杏和高等学校
地域研究グループ

毎年、祖父江の虫送りを調査をし、その成果を積み重ねている。一つのテーマに継続的に取り組むことで、年々知識が蓄積されるとともに、常に新たな発見があり、また新たな課題が生まれていることがわかる。近隣地区の虫送りや常滑市矢田地区の虫送り調査は、現在行われている行事の実態を的確にとらえており、祖父江の虫送りとの違いや共通点を浮き彫りにしていて興味深い。文献調査や情報発信の取り組みにも意欲的で、今後の展開と広がりが期待される。

佳作

「2020東京大会に向けて全国・全世界に発信したい三島ー沼津間6.6㎞の道」
静岡県立沼津城北高等学校
情報メディア部

静岡県初の民営電気鉄道、伊豆箱根鉄道軌道線が三島、沼津間を走ったその廃線跡の調査から、路線が旧東海道に沿ったものであることを確認したのが研究のスタートだという。そこに歴史・伝説・文学などにゆかりの史跡が多い事を知り、実際に現地を歩いて調査を行い、その場所にまつわる歴史や言い伝えを丹念に記述していて読み応えがある。わずか6.6km の間に、これだけ豊かな歴史と文化が息づいていることを知った驚きと喜びが、豊富な写真とともに伝わってくる。

佳作

「自分たちの足元をみつめる　～我が家のお雑煮から“今”を考える～」
愛知県立杏和高等学校
旧2年3組お雑煮調べ隊

クラスの仲間が持ち寄った雑煮のレポート29件をもとに、角餅か丸餅かといった餅の形や調理法など五つの視点から比較し、その特徴を描いている。文献調査から餅の形状や味付け、具の種類に地域性があること

を確認し、自分たちが調べた具体的な事例についてその背景を考えている。そして、そもそも雑煮とは何か、年の初めに食べることにどのような意味があるのか、正月に歳をとることと数え年との関係など、雑煮をめぐる多様な民俗文化に関心が広がっているのがわかる。

■個人の部

最優秀賞

「漬物で語る　～『知らない』と『忘れる』に立ち向かう人々～」

愛知県立杏和高等学校

飯田　真世

昨年に引き続き萱津神社の香の物祭りについて調査・研究した成果である。香の物を漬けなおして美味しい漬物にする試みをしている「結の会」の女性三人からの話と、今年の香の物祭りについて報告している。聞き書きでは、塩のみでつけられものを漬けなおすむつかしさや苦労、技術的な過程について、じつに細かく具体的に描いている。飯田さんの質問が上手で、女性たちとのやり取りそのもののなかに、漬けなおしの現在の姿が浮かび上がってくる。聞き書きという方法が力を発揮しているとともに、着眼点がよい。

優秀賞

「福井県敦賀市の伝統行事、「敦賀まつり」について」

東京・広尾学園高等学校

荒殿　一花

敦賀市の気比神社の例祭「敦賀まつり」について調べたものである。敦賀市は一花さんの祖父の出身地。久しぶりに訪ねた町は人口が減り寂しくなっていたが、活気に満ちたお祭りが行なわれていることに気づき、このテーマを取り上げたという。関係資料をよく読んで、室町時代末には成立していたという山車の歴史的変遷や現在の祭礼について的確にまとめている。次回はぜひ祭りの時に訪ねて、一花さんの目で見た祭りの姿や敦賀の文化についての調査を期待したい。

優秀賞

「変化していく音頭　～音頭から始まる流行音楽のかたち～」

愛媛・済美平成中等教育学校

武井　千夏

「河内音頭」や「東京音頭」など、夏の盆踊りでは今も多くの人が歌って踊る光景を見かける。古くは雅楽のオンドウから派生したといわれる音頭が、現在においてどのように展開しているか、アニメの影響をはじめ多面的な視点で描きだしている。武井さんの地元の「松前音頭」の歌詞には、旱魃のときに農民を助けた義民作兵衛や水乞に尽力したおたたさんなど、町の歴史と民俗が歌い込まれていて興味深い。他の音楽との違いや、海外での展開にも視野を広げていて示唆に富む内容になっている。

佳作

「関西弁は日本語習得の良いツールとなりえるのか～外国人の第二言語習得からみた関西弁～」

東京・渋谷教育学園渋谷高等学校

弓場　鈴響

外国人が日本語を学ぶときに、関西弁はどれだけ身につけやすいのかという課題を設けて調べたもの。論旨の展開とともに文章が整然と叙述されていて無駄がない。関西弁は母音がはっきりしていて、聞き取りやすいために外国人にとっては発音しやすい面があることを述べ、反面でイントネーションの高低差が複雑で、その変化を習得する点では高いハードルがあることも指摘している。言語学者の研究を積極的に参照しながら、また、留学生へのインタビューを交えて手際よくまとめている。

佳作

「報恩の民『台湾少年工』は日本統治時代における犠牲者でしかないのか」

神奈川県立横浜国際高等学校

矢川　優里

第二次世界大戦末期に、高座海軍工廠で戦闘機などの製造にあたった台湾少年工について、当時の厳しい現実や、戦後の交流について描いている。両親のアドバイスを得て、関連する資料によく目を通し、元少年工だった人たちの証言や手紙などをもとに、空襲による恐怖や台湾に帰ってからの困難な生活、やがて結成される台湾高座会と日本の関係者たちとの心温まる交流の軌跡をたどっている。矢川さん自身の目からその実態をとらえ、本来の姿を描くことに力を注いでいる。

優秀賞

地域民話研究部門（団体）

おたちきさん
～なぜ、五百年以上祀られ続けてきたのか？～

愛媛県立西条高等学校
地域・歴史研究部
（髙橋陽佑、玉井勇伍）

応募の動機

このコンテストのことを知り、ぜひ自分の故郷である西条市のことについて研究して応募したいと思った。また、コンテストを通じて多くの人に西条市のことを知ってもらいたいという気持ちもあった。さらに、自分の研究を応募することで評価やアドバイスが頂けるよい機会だと考えた。

研究レポート内容紹介・今後の課題

「おたちきさん」。私の住む西条市のことを調べている際に読んだ『西条の民謡と伝説』で紹介されていた西条市釜の口地区の“伝説”の一つである。石川源太夫と隣の領主である黒川氏との間で起こった戦での活躍により、黒川側は城を落とせずにいた。そこで、黒川側は石川源太夫に対して策略を用いて誘い出して暗殺するにいたった。石川源太夫はとても人徳があったため、付近の農民が石川源太夫の死を悲しむとともに、その武勇を讃えて「おたちきさん」と呼んで祀り始めたそうである。

私が読んだ『西条の民謡と伝説』によると、愛媛県西条市内にある釜の口という地区に祀られていると記されていた。そこで、実際に釜の口地区を訪ねて自治会の方からお話を伺い、集会所の２階にある神棚が「おたちきさん」を祀ったものだということが分かった。慰霊祭を毎年７月頃に行っており、後日参加させていただいた。隣の木挽原（こびきわら）地区にも祀られており、祀る場所が複数存在していることから、地元の「民から尊敬されていた」ということは事実のようだ。

次に、「石川源太夫」のことについて調べた。方法としては、文献調査を中心にフィールドワークなどを行った。様々な書籍から石川源太夫という名前が確認でき、実在の人物であることが分かった。勇猛果敢で知恵が優れた人物だったことはどの文献も一致しており、事実だと考えていいだろう。なぜ、勇猛果敢で知恵が優れ民衆からも尊敬されていた「石川源太夫」は暗殺されてしまったのだろうか。そこで、死の真相についてその経緯を調べたところ、文献や資料によってさまざまな経緯が確認できた。例えば、「石川源太夫」が戦に負けそうになった時に、彼が立て籠もる城を落とすために敵方の手によって暗殺された説や、「源太夫」が氷見高尾城の城主になった後に奢りの心が出たので暗殺された説など様々であった。このように人徳があったが無残にも暗殺されてしまった石川源太夫の死を地域の人々が悲しみ、その勇敢さをたたえ「おたちきさん」として祀り、今に繋がっている。以上が、現段階での調査の成果である。

今後の課題としては、審査をしてくださった先生方から頂いたアドバイスをもとに、文献調査などをさらに進め、「おたちきさん」として祀られた経緯や複数祀られている理由などの考察を深めていきたい。そして、研究成果を釜の口地区の方々にも披露したい。

釜の口集会所での聞き取り

木挽原にある「おたちきさん」を祀る神社

優秀賞

地域民話研究部門（団体）

民間に根付く妖狐妖狸伝

群馬・高崎商科大学附属高等学校
社会部特選・特進男子
（大塚蒼太、青柳忠矩、新井千寛、土屋貴博、
狩野貫太郎、坂本蒼輝、秋山幸輝、霞拓真）

応募の動機

私たちが本コンテストに作品を応募した理由は二つあります。

一つ目は、昨年のコンテストで優秀賞を受賞した部活の先輩方に続き、私たちの代でも賞をいただきたいという思いから。

二つ目は、私たちの郷土に伝わる伝説、伝承の研究を私たちの間だけでなく、より多くの人に知ってもらい共有したいという思いからです。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私たちは「民間に根付く妖狐妖狸伝」というテーマで研究を進めてきました。まず私たちが注目したのは群馬県館林市にある曹洞宗茂林寺に伝わる「分福茶釜」の伝説です。茂林寺が地元群馬県にあるということもあり、私たちは実際に茂林寺に行き調べてみることにしました。まずは伝説の内容を簡単に紹介します。

茂林寺本堂

昔、茂林寺の寺の和尚が森で狸を助けた。その狸が茶釜となって化けて出て、それを見世物としたところ、噂は各地に広がり大繁盛した... というのが一般的に知られている分福茶釜の話ですが、茂林寺の見学や書籍で調べてみたことからこれには元となった話があり、それは江戸時代に平戸藩主の松浦静山によって書かれた甲子夜話だということまで調べました。

狸などの動物が化けるということや、それに似た伝承はないかとさらに調べていくと、私たちは「日本三大狸伝説」なるものが存在することを知りました。そして私たちはそのうちの一つである「証誠寺の狸囃子」について調べようと思い、千葉県木更津市にある証誠寺について調べることにしました。

証誠寺に伝わる狸囃子の伝説は、民謡「証誠寺の狸囃子」のモデルとなり、その民謡の舞台になったのもこの寺だということがわかり、さらに研究の幅が広がりました。

証誠寺の「狸塚」

さらに調査を続けた私たちはさらに類似の伝説が身近にないかと思い、書籍で調べていくうちに私たちが住む市内や群馬県各地にも多く存在することがわかりました。どの伝承でも狸や狐が何かほかのものに化けたり、人間をだましたり憑依するものがほとんどでした。

このような物語のルーツをたどるととても古い歴史があり、日本では日本書紀（奈良時代）や日本霊異記（平安時代）にも記されていることがわかりました。このような物語のはじまりは中国であるといわれていて、古いものでは紀元前 1100 年頃の殷王朝の王の妻である妲己に狐が化け王を惑わせたという伝説も残っているそうで、古代より人々の生活に狸や狐の存在が浸透していることがわかります。

私たちは、なぜこのような狸や狐に関する物語や伝説が生まれたのかを、人々の生活や風習、信仰や当時の時代背景などから私たちなりに考察し、結論に至ったのがこの研究の内容となっています。

優秀賞

地域民話研究部門（団体）

「あくねの　なな　不思議なおかし」
～阿久根の七不思議を調べて～

鹿児島県立鶴翔高等学校
郷土芸能同好会
（有田詩文、黒岩詩音、河野真有、平田文）

応募の動機

鹿児島県阿久根市は、観光客が少なく、衰退の一途をたどっている。最近では、イベントや名産品を生かした新たな商品開発やブランドショップを立ち上げ、いろいろな地域活性化策が講じられている。私たちも地元の活性化のために、「阿久根の七不思議」を題材にお土産やイベントを提案し、地元の活性化の手助けができないかと考えた。

研究レポート内容紹介

阿久根の七不思議（阿久根七奇）とは

『三国名勝図会』によると「阿久根村の中に、奇妙なものが七つある。よって土地の人は七奇と称した。」とある。その他の郷土資料も調べた上で、実際に七不思議を見て回った。

(1)　光礁（ひかるぜ）
　輝く光の色は、白銀を溶かしたような色で、外国人が海底にダイヤモンドが隠されていると考えて探したという。実際、本当に海底に黄金が埋まっているのではないかと思わせる岩であった。

(2)　隔丘（おかごし）の塩田
　この塩田では、明治末期まで盛んに塩造りが行われてきた。伝説によると旅の僧によって製塩法を教えられたという。潟と呼ばれる湿地帯にあったが、近年は住宅地となっている。

(3)　天狗（大人：おおひと）の足跡
　天狗が対岸の島へ跳ぼうとして、大岩に足跡が残ったという。実際、足の跡がくっきりと残っていた。

(4)　岩船
　丹後の国を出た船が、現在の折口川の河口近くの砂浜に乗り上げたという。川の護岸工事が原因で、砂で埋まってしまったという。実際は、砂浜の中に小山ができていた。

(5)　佐潟の洞窟（小潟崎穴）
　内部が３方向に分かれており､それぞれが行き止まり。昔の穴住居とも言われている。今も見にいけるが、岩や木がたくさんあり、波も高い時もあるので注意して行くべきだ。

(6)　尻無川
　弘法大師が村人に大根を所望したところ、与えなかったため川の水が絶えてしまったという伝説がある。　実際、河口には大粒の砂礫が堆積し、今も河口が塞がれた尻無川を見ることができた。

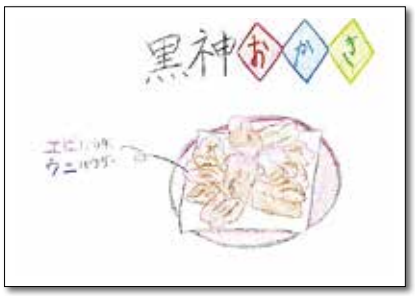
(7)　黒神岩
　地殻変動でこの黒神岩一帯が沈下し海に水没して、その中の巨大な岩だけが水面上に頭を出す結果となったとある。実際、大きな岩が林立して貝殻も付着していた。

尻無川河口

以上文献と見学をもとに話し合った結果、今回は「**あくねの　なな　不思議なお菓子**」という名前で、七不思議にちなんだお菓子を提案することにした。ひとつ例を挙げる。

例：「黒神おかき」というお菓子を提案する。形は黒神岩を、おかきで再現した。黒神岩は、昔、海のそばにあり、貝殻などの痕跡も残っていることから、阿久根で漁獲されるタカエビやウニをパウダーにして、おかきにまぶすことにした。

他にも、光礁トリュフ・塩田せんべい・足跡もち・岩船タルト・洞窟ドーナツ・尻無川寒天というお菓子を提案した。



考案したお菓子の例（黒神おかき）

今後の課題

今回、「あくねの　なな　不思議なおかし」のアイデアをまとめたが、本校の食農研究部と共同でこのお菓子の試作を行っていきたい。また、お菓子の開発だけでなく、これを機に多くの人に七不思議スポットを訪れてもらうために、集客イベントなどの提案も行っていきたい。

佳　作

地域民話研究部門（団体）

高尾山の天狗伝説

東京・共立女子第二高等学校／神奈川・桐蔭学園高等学校
高尾研究会
（小林実莉、武島亜矢子）

応募の動機

学校に貼られていたポスターでこのコンテストのことを知りました。地域の民話を調べてみると、よく街で見かける天狗のお面や銅像は高尾山の天狗伝説に関係するものだということを知りました。そこで、もっと深く知りたいと思い、高尾山の天狗伝説について調べることにしました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

高尾山には、「天狗さらい」という民話があります。死ぬまでに一度でいいから高尾山に登りたい、と願う老人が、いつも高尾山に向かって手を合わせていたところ、突然薬王院（高尾山にある寺院）のお堂に姿を現します。驚く僧たちに、大増正が「これは天狗さらいだ」と言い、この老人を自分たちのお勤めへと向かい入れます。この老人は僧たちとお勤めをした後、煙のように姿を消し、その後ずいぶんと長生きしたという話です。私たちは、天狗＝妖怪というイメージを持っていたため、この民話を読んで意外に思いました。さらに、他地域に伝わる民話では、人々に悪戯をするものとして書かれてるものもあります。ここで、私たちはなぜ高尾山の天狗は良いものとして書かれているのか、なぜ地域にこれほど深く根付いているのかを調べることに決めました。そして、実際に高尾山に登り、薬王院の方にインタビューをしに行きました。まず、天狗の成り立ちの説にはいくつかあり、その１つとして有力なのが修験道という宗教に関わるものです。高尾山では古くから修験道の修行が行われており、修行を終えた山伏や修験者と呼ばれる者が里に帰り、修行での経験や得た知識で人々を精神的、肉体的に支えたことから、彼らが天狗として神格化されたという説です。さらに、天狗は修験者たちを護る山の守り神として崇められ、守護神とされています。修験道では不殺生を強調しているので、天狗は自然を守り、人々も守ってくれるというイメージから人々の間で広まっていったものと考えられます。そのようなイメージから、人々は天狗を古くから親しみ、神としてその存在を大切にしてきたのです。実際、高尾山の麓の店には、沢山の天狗の商品が売られており、高尾山から離れたところでも、天狗のお面が飾られているのをよく見かけます。今回、高尾山に登ってみて 私たちは、高尾山の自然の豊かさは、人々が天狗という存在を重要視し、大切にしてきたことで守られてきたものなのだと実感することができました。

高尾山の山道

今後の課題は、１つは天狗の神か妖怪かの存在をもっとはっきりさせることです。天狗は空想上の生き物なので、やはり曖昧なところが多く残ります。他地域の民話の天狗に対するイメージを比較することで、「天狗」という存在をより確かなものにできれば、もっと深く知ることができるかもしれません。また、高尾山の天狗は、人々の自然に対する見方や大切に想う気持ちの表れに関係すると考えたので、今回の天狗の調査を高尾山の自然保護に活かせるような活動をしていきたいと思いました。

「高尾山の天狗さま」

佳　作

地域民話研究部門（団体）

衛門三郎伝説

愛媛県立東温高等学校
郷土芸能部
（小椋詠亮、山口翔聖、只木克己、大西哲平、渡部良磨）

応募の動機

私たちの地域にはたくさんの伝説があることを知っていましたが、なかなか調べる機会がありませんでした。そんなときに顧問の先生がこのコンテストを紹介してくださったので、地域活性化にもつながると思い、夏休みを利用して作品づくりに取り組むことにしました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

衛門三郎は、松山市久谷地区に伝わる伝説の１つです。

しかし、知らないことも多くあったので、この機会に調べてみようと思いました。

あらすじは、昔、衛門三郎という欲深い長者がいました。ある日、托鉢の僧を弘法大師とは知らず、彼の手の中に持っていた鉢を彼に向って投げつけました。すると、鉢は八つに割れ、そのあと、八人の息子が次々と死んでいきました。その後、邪心を捨て、改心した衛門三郎は大師を追って四国巡拝に旅立ちました。その時に、衛門三郎が歩いた道が四国遍路と呼ばれるようになったとされています。徳島の焼山寺で衛門三郎が行き倒れになったとき、突然弘法大師が現れ、石に「衛門三郎」と刻み、彼の手に握らせました。衛門三郎は安心して息を引き取ったといいます。そのあと、この地方の大守であった河野氏の家に男の子が生まれました。右手を開かないので僧が願をかけました。すると、手の中から「衛門三郎」と書かれた石が出てきました。その石は安養寺に収められ、安養寺は、寺号を石手寺に改めました。

私たちは、この物語について深く知るために、物語に関わるいくつかの場所を訪れました。

初めに、「衛門三郎」と書かれた石を持った子供が生まれたという伝説のある石手寺を訪れました。

境内には、衛門三郎の石像や、安養寺に生まれてきた子供が握っていた石をイメージしたような石の石像など、衛門三郎に関するものがたくさん残されていました。次に、衛門三郎が弘法大師に追いついた場所といわれている文殊院に行きました。文殊院は、弘法大師が衛門三郎の子供の供養とともに悪因縁切御修法をなさった四国唯一のお寺です。ここには弘法大師や衛門三郎の妻などの大きな石像がありました。今では、この寺にはアニメのキャラクターなどの石像もあり、小さなお子さんや海外の人などにも親しみやすくなっていると感じました。他にも浄瑠璃寺や八ツ塚等さまざまな場所を訪れました。

石手寺の衛門三郎像

私たちは、お遍路さんにインタビューをしてみました。海外の人にもインタビューをすることができ、海外と日本の宗教的な文化の違いにも気づくことができました。「一度まわってみて四国の歴史を感じる街並みを見たり、四国の方々がとても暖かく迎えてくれたからもう一度回りたくなった」などの声も聞くことができ、違う観点から四国遍路の良さを学ぶことができました。

来年度は、もっと広く、深く、たくさんのことについて調べてみて地域活性化に今回以上に貢献できるように努力していくつもりです。

久谷の文殊院

最優秀賞

地域民話研究部門（個人）

「鬼」考　～今昔物語集と民話における～

東京・世田谷学園高等学校　２年
大和田　一　稀

応募の動機

私は元々民俗学に興味はあり、本も数冊読んでいた。進路もそちらに進もうと考えていた。しかし、私は今まで自分の興味ある分野について自ら調査し、それらをまとめ、研究する、というごく基本的な行いもしたことがなかった。それを自ら少し恥じていた。そこで、このコンテストを知り、以前より興味を持っていた分野について研究をしてコンテストに出場することにした。

研究レポート内容紹介・今後の課題

このレポートは、主に二つの研究に分かれている。一つ目は、古代日本（平安時代）の民話集といえる「今昔物語集」に登場する鬼を分類し、それぞれの鬼の特徴を把握した上で、当時の賤民と照らし合わせることで、自分が興味を持った、辞書には書かれていない「鬼＝賤民」という言説を検証してみる、という研究だ。様々な説話から鬼の特徴をとってみると、「肉食」、「墓守」、「警察」、「演芸」などを行う点で賤民と鬼が共通していることがわかった。これにより、「鬼＝賤民」という言説にある程度の根拠を提示できた。

二つ目は、一つ目の研究で把握した「今昔物語集」に登場する古代における鬼の特徴と今に伝わる民話に登場する鬼の特徴とを比較するものである。この研究によって、古代における鬼の一つ、「悪しき鬼」が現代では赤鬼・青鬼と鬼婆・山姥の二つに分化していること、古代から現代にかけて鬼の住処が変化していること、鬼の種類の増加、鬼が主に「人を襲うもの」から「退治されるもの」とその立場を変化させていること、などがわかった。これらのことから、人が鬼に対して、古代には畏怖の視線しか投げかけていなかったが、現代の民話となるにかけて、人が鬼に対し憎しみの視線も投げかけるようになったというような、今昔における人と鬼との距離の変化の一端を明らかにできた。

今後の課題として挙げられるものは、まず、二つ目の研究において、鬼の特徴をまとめ上げる際に参考とした民話は特定の地域のものではなく、様々な地域の民話からまとめ上げた、言わば一般的な鬼である。勿論、古代の鬼と民話の鬼とで簡単に比較するのならばこのような一般的な鬼でも良いのだろうが、より正確な比較をするにあたっては、地域ごとに鬼の像をまとめ上げなければならないであろう。

逆の古代の鬼もまた然りである。今回古代の「鬼」像をまとめ上げるために用いたのは「今昔物語集」のみである。しかし、周知の通り古代の説話集は「今昔物語集」だけではない。そして勿論、古代の「鬼」観を探るのであるから説話集でなくとも、物語でも、場合によっては随筆でさえ重要な参考資料となる。古代という時代の古さゆえに、鬼についての全ての資料を集めることは不可能かもしれないが、古代の「鬼」像をできる限り再現したいのならば、それを記したできる限り多くの文書を解析しなければならない。そして私は、多大なる知的好奇心をもって、この事業に従事したい・しなければならないと強く感じている。

都立中央図書館。今昔物語集や民話などの資料を求めるのに大変役に立った。

今昔物語集に登場する鬼に近い鬼のイラスト

優秀賞

地域民話研究部門（個人）

河口湖天上山に伝わる『カチカチ山伝説』の真相
～カチカチ山伝説の発祥地は本当に天上山なのか？～

山梨県立吉田高等学校　３年
廣　瀬　香　奈

応募の動機

所属していた「社会研究部」の顧問の先生から、コンテストの応募用紙を頂いたことがきっかけとなっています。幼いころから親しんできた天上山について改めて探求してみたいと感じたのと同時に、文学との関わりが深い魅力的な山だということをより多くの人に伝えられればと思い、応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私の住んでいる山梨県富士河口湖町には、日本五大昔話に含まれている『カチカチ山』伝説の発祥地と謳われている“天上山”という山があります。小学校の遠足で訪れるなど、この山に触れる機会が多かった私は“なぜ天上山はカチカチ山伝説の発祥地と言われるようになったのか”疑問を持ち、今回調べることにしました。

天上山にある太宰治の石碑

天上山とは、標高 1104 mの比較的小さい山です。しかし、富士山との距離が非常に近く、展望台からは雄大な富士山を望むことが出来るため、山梨県の観光スポットの一つとして数えられています。また、展望台の付近には、昔話『カチカチ山』を表現したモニュメントが様々な場所に設置してあります。

カチカチ山の像と富士山

カチカチ山伝説は室町時代に成立したと言われ、以降人々の口伝によって各地に広まっていきました。江戸時代初期には「むじなの敵討ち」という題名で本格的に世に知れ渡るようになり、江戸時代寛文期（1673 頃）には、赤本の中に収録されている「兎の手柄」という物語が出回りました。そして、私達がよく耳にするカチカチ山は、明治 28 年（1895）巌谷小波の“日本昔噺”によって出来上がりました。

カチカチ山伝説は昔話という事もあり、明確な発祥地というものが存在しません。新潟や東北地方（秋田県が有力）に、現在のカチカチ山伝説に類似した昔話が存在するようですが、富士五湖地域の中にカチカチ山伝説に繋がる文献はありませんでした。

観光客への取材

では、なぜ天上山がカチカチ山伝説と関係があると言われているのでしょうか。天上山のロープウェイ乗車中に流れるアナウンスでは、“天上山は、文学家の太宰治の作品「お伽草子」中のカチカチ山というお話の舞台になっている”と放送されています。この放送が事実であれば、天上山はカチカチ山伝説の発祥地として関係しているのではなく、太宰治の『お伽草子～カチカチ山～』の舞台として関係しているという事になります。

実際に作品の本文中には天上山に該当する箇所が複数存在し、（“これは甲州、富士五湖の一つの河口湖畔、いまの船津の裏山あたり”・“あれが富士山だし、あれが長尾山だし、あれが大室山だし”）調査を行い地図を製作してみると確かに天上山が当てはまりました。

以上の事から、天上山はカチカチ山伝説の発祥地という訳ではなく、太宰治の作品の舞台であることが分かりました。残念ながらこの真相は殆ど知られていません。そのため今後はホームページやパンフレット等を改良し、カチカチ山の真相を広める活動が必須になると考えています。また、私も継続してこの真相について調査し、カチカチ山と天上山の関係についてより一層の理解を深めていこうと思います。

優秀賞

地域民話研究部門（個人）

澤様と人々の思い

愛知県立杏和高等学校　２年
木　村　心　優

応募の動機

「澤様」のことを初めて知ったのは小学４年生、自分の住む地域の昔話を調べてみようという授業でのことでした。そこで興味をもち、小学校、中学校と「澤様」について調べてきました。高校生になった私は、新聞で「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」というものがあることを知り、応募してみたいと思いました。

研究レポート内容紹介

愛知県稲沢市平和町須ヶ谷では「澤祭り」という行事が行われています。須ヶ谷村をはじめ水害に悩まされた十七ヵ村を、私財を投じてまで救った清洲代官の澤園兵衛重格を供養する行事です。この「澤祭り」について、なぜ200年以上も続いているのか、昔の「澤祭り」はどのように行われていたのか、疑問に思いました。なので以下の調査を行いました。

・当時の村の様子や澤代官の功績が書かれた文献を調べる。
・実際に「澤祭り」に参加する。
・須ケ谷の住民の方、澤園兵衛重格の子孫の方にインタビューする。

澤家の方々との写真

澤君遺愛碑

調査内容

１．澤園兵衛重格とは

第二代の清洲代官。雨が降るたび洪水に悩まされていた須ヶ谷村をはじめ十七ヵ村の状況に心を痛め、私財を投げうってまで11年に及ぶ治水工事を完成させた。

２．水害に悩まされた十七ヵ村とは

十七ヵ村と伝えられているが村名はあきらかでなかったので、『平和町誌』『寛文村々覚書』『尾張徇行記』を参考に推測した。

３．澤様を祀る社、祠

農民たちは、澤様の功績を偲び称えた。そして、主な村々に社を建て、澤様の命日には毎年盛大に祭りを行った。私は、現在でも残っている須ヶ谷の「澤君遺愛碑」。稲沢市中野宮町の塩江神社境内にある「澤園社」、稲沢市儀長にある大福寺内の「番神祠」に実際に実際に行き、調査した。

４．インタビューをする

澤園兵衛の子孫の澤國生さんに話を聞くことができた。神様として祀られている人の子孫と直接会話できるというのはとても貴重で、いい経験になった。須ヶ谷の方々にもインタビューをしたが、詳しくは知らないという人が多かった。そして、詳しい人はもうすでに亡くなってしまったと聞かされたため、昔の「澤祭り」の様子や行事に対する人々の思いは、はっきりとはわからなかった。

今後の課題

今回行ったインタビューでは、詳しく知らないという人が多かった。このままでは、澤様のことが忘れ去られてしまうかもしれない。民話を「伝える」ということの必要性を強く感じた。次回は、「澤祭り」が行われる経緯について、「知らない」と答えた人たちに着目し、なぜそうなったかを明らかにしたい。また、技術的な面での課題も多い。見やすい字の大きさ・色分け・写真の配置などに気をつけて作品作りを行いたい。
このような賞を頂けるとは思っていなかったので、本当にうれしい。協力してくれた皆様に感謝申し上げます。

佳　作

地域民話研究部門（個人）

六合物語
～これを語りて柳田國男を戦慄せしめよ～

高崎市立高崎経済大学附属高等学校　３年
小　杉　恒　太

応募の動機

私の将来の夢は六合村の民話を後世に残していくことです。そこで、今まで調べてきた事がどのように評価されるのか大変気になり、このレポートを制作しました。

六合村には現在、100 を超える民話が残っています。このレポートでは、その中から特に有名なものと、語り部の方が大切にされているもの２つを提示し、語り部の方の見解と自身のフィールドワークからその民話が何を伝えたいのかを探りました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

１「宵の山本・明けの山本」

六合村には「山本」という姓の人が多くいます。しかし、同じ山本でも宵の山本派は正月に門松を立て、明けの山本派は門松を立てません。というのも､六合村には「入山メンパ」という赤松を使用した民芸品があり、正月に門松を立てない家をつくることで、メンパに使用する赤松の過剰伐採を避けようとしたのではないかと考えられます。

これを伝える民話では落人が登場し、前半の軍勢は年明け前に入村できたため門松を立てることができ、後半の軍勢は年が明けてしまったため門松を立てることが出来なかったと伝えています。これが現在まで引き継がれているため、２つの山本が存在していると言われています。

民芸品の「入山メンパ」

２「ホリキリザワの龍」

六合村は非常に滝や川が多く、このホリキリザワも実在します。ここはかなりの秘境地で、到達するためにはいくつもの滝を過ぎ、山道を進まなければいけません。そこには「ケンズリ穴」という小さな穴があり、そこに指を入れると大きな災いと引き換えに雨が降ると言われています。むかし、六合村が飢饉に襲われた際、若い村人がそこに指を入れて、雨と引き換えに龍と死闘を繰り広げたという伝説が残っています。語り部の方はこの伝説を最も大切にしており、発表会などでは必ずこの伝説を語るといいます。この伝説から、今自分が住んでいる地域も祖先が必死に守ってきた土地だということを感じることができます。

高野長英が隠れていた「湯本家」

今回のレポート制作にあたって、民俗学の祖である柳田國男先生の『遠野物語』を不十分ながら模倣した「六合物語」も制作しました。六合村の民話を多く発信していくためにも、今後は発信の仕方にも目を向けていこうと思います。

佳　作

地域民話研究部門（個人）

箱根における九頭龍伝説

神奈川・鎌倉女子大学高等部　２年
石　田　瑠　奈

応募の動機

私はよく小・中学生の夏休みに箱根へ家族旅行していて、箱根神社のついでに九頭龍神社へ三度ほど訪れたことがある。その時にこの神社に龍神様が関係していると、聞いたことがあったがそれ以上のことは何も知らなかった。私の住んでいる茅ケ崎市の歴史は今まで調べてきたので、県内の他の町のことも知りたくなった。そこで、この伝説についてもっと知識を深めたいと思い、調べることにした。

研究レポート内容紹介・今後の課題

まず、私は箱根の地に伝わる九頭龍伝説について調べた。

その昔、芦ノ湖は万字が池と言って箱根権現の御手洗の池と呼ばれていた。

「また毒龍が出て人を食べてしまったそうだ」

ここではそうした恐ろしいことが度々起こり、村中の人々をおびやかした。毒龍は夜になると万字が池の住み処から荒波を蹴立ててやってきては、村の人々に危害を加えた。

そこで古老を中心にみんなで集まり、あれやこれや相談した結果、残酷ではあるものの犠牲者を少なくするために人身御供（ひとみごくう）の娘を差し出して悪龍の機嫌を取ることに決まった。

ちょうどそのころ、箱根の山に万巻上人（萬巻上人）という坊さんが修行に来ていた。

人身御供のことを聞いた万巻上人は村へ下りてきて、娘を生贄に沈めるかわりに、池の底に向かって石段を造らせた。そして祭壇を築き、日夜断食をして祈祷を続けた。

そうすると、渦の真ん中から一匹の毒龍が姿を現すと、静かに上人の前まで泳いできて頭を下げた。

「どうぞお許しください。もう決して悪いことはいたいません」

と、今までの罪を詫びて深々と謝った。

万巻上人はようやく毒龍の罪を許してやり、これからは龍神として万字が池と村を守るようにしなさいといって、その化身を九頭龍明神とした。それから生贄の話は絶えてなくなり、代わりに毎年三升三合三勺の赤飯をおひつに入れて湖水に沈め、村の安泰を祈るようになった。

箱根神社境内

本やサイトで伝説について読んでいても臨場感がないのでこのお話の場所である箱根へ実際に行ってみた。

まず、私は箱根神社へ行った。

箱根神社にて参拝をした後、おみくじを引こうとしたところ、多くの種類があった。

その一つに「九頭龍みくじ」というものがあり、表には龍の絵が描かれていた。九頭龍が龍神として今もなお、崇められていることがここからわかる。

次に、私は九頭龍神社本宮へ向かった。

伝説で九頭龍を祀った後、“山々のたたずまいは以前の平穏な生活を取り戻した”とあったが、本宮はまさにその通りの静けさであった。境内の、芦ノ湖側へ行ってみると湖へ続く石段があった。

箱根神社境内「龍神水」の九頭龍

石段といえば、“娘を生贄に沈めるかわりに、池の底に向かって石段を造らせた。そして祭壇を築き、日夜断食をして祈祷を続けた”という部分が伝説の中にある。

その石段とは、この九頭龍神社の湖に続いている石段のことなのではないだろうか。

今回九頭龍伝説を深く知っていくと、伝説も現実のうちなのではないかと、思った。それは、伝説の中に出てきた様々なものが実際に存在していて、自分の目で見ることができたからだ。

私は、箱根の九頭龍伝説を調べたが、ほかの地域の九頭龍伝説にも興味を持った。もし機会があれば、戸隠神社など、九頭龍の言い伝えがあるところにも行ってみたい。

地域民話研究部門選評

國學院大學教授　花部　英雄

■総評

今回「地域民話研究部門」の応募作品を読みながら、数年前に比べ質的に向上しているような印象を受けた。これに間違いなければ、しだいにコンテストの趣旨が理解されてきたように思える。いうなら民話とは何か、その研究、作品化に向けてどのようにすればいいのかの理解が、浸透し定着してきた結果ではないかと考えている。そこで、次年度の応募者の参考のためにも、基本に立ちかえって、「地域民話研究部門」が求めるコンテストの趣旨を再確認し、さらに周知徹底する必要から、以下そのことに触れておきたい。

まず、民話とは「民間説話」の略であるとか、あるいは「民衆の話」であるなどとか、研究者によって語源を含めての定義が定まってはいないが、ただ、学問的な裏づけを持つ対象として「昔話」「伝説」「世間話」を指すということには、おおかた異論はないであろう。「昔話」はいわゆる「むかしあるところに…」で始まり、「めでたしめでたし」で終わる様式性のある物語的な内容で、これには笑話も含まれる。これに対して「伝説」は、神仏や巨人などの出来事や、義経など過去の人物の事件、また、山や岩、池沼など自然物に関わる説明的な話が多い。「世間話」は、日常の事件や人の噂、天変地異や死後・異界・妖怪などの非現実な話である。

この三つの形態の話は、当然ながら話の機能や場、享受者による違いでもある。いまそのことに詳しく触れることはしないが、人間同士がコミュニケーションをはかり、社会生活を円滑に維持するために、この口頭の形態は欠かせない重要なものである。

次に、その民話をどのように研究するかであるが、それには大きく二つある。一つは民話そのものの研究と、もう一つはその民話の活用ということである。前者の民話研究とは、地域における民話の特徴を明らかにすることから始まり、その民話がどのように誕生、成長し、地域的特性を示しているかを調べることである。また、地域を越えて、民話の移動や変化等を比較研究することでもある。

もう一つの民話の活性化については、今回も鹿児島県阿久根(あくね)市における伝説を、菓子作りに生かそうとする試みの作品があるが、民話を地域の活性と結びつけて利用するのも、その一つである。地域の遺産である民話を、地域住民や他地域の人々に向けて発信するなどの活用は、民話のこれからにとって大切な役割といえる。こうした趣旨を理解した上での作品作りを提唱したい。

ところで、念のため今年度の審査基準、および評価のポイントを示しておく。審査は次の基準で行なっている。第一に、民話の採集地や伝承地を訪ね、民話の地域環境や生活上の意味を理解するなどのフィールドワークを行なっているか。第二に、そのために必要な文献や資料などを精査し盛り込んでいるか。第三に、そのようにして得た材料を十分に分析・考察した結果を、自分の言葉でまとめているか、ということが中心となる。

■団体の部

優秀賞

「おたちきさん～なぜ、五百年以上祀られ続けてきたのか？～」

愛媛県立西条高等学校

地域・歴史研究部

石川源太夫の最期が「伝説じみている」という素朴な疑問から、その解明に向けての研究がスタートする。知勇兼備の人望のある石川源太夫がなぜ暗殺されたのか、また、死後に地域住民により神として二か所で祭られているのはなぜか、といった疑問を提示しながら、その真実を究明しようとする方法は明晰で惹きつけられる。そのために豊臣秀吉の四国攻めや、当時の四国の政治的状況を踏まえながら、蓋然性の高い結論を追究する。

ここまででいえば、これは歴史研究になるが、実は石川源太夫は「おたちきさん」の神として、地域住民に祭られており、その慰霊祭に参加し調査を行う。五百年を経過しても、なぜに人々に信仰されているのか、この究明は伝承研究のテーマでもある。現在、慰霊祭に取り組む人々の意識や、地域と神社との現実的な関係など、総合的に調べて明らかにするのが民話研究である。

優秀賞

「民間に根付く妖狐妖狸伝」

群馬・高崎商科大学附属高等学校

社会部特選・特進男子

狐狸にまつわる伝説を、八人のチームワークによるフィールドワークを中心に実証的に追究した研究レポートである。茂林寺の文福茶釜や木更津の証誠寺(しょうじょうじ)の

狸話を実地に訪ね、それに言及した文献等を確認する。続いて、郷土の群馬県の狐狸伝説を調べ、伝説の背景にある自然や動物への民間信仰が基にあることを明らかにする。手堅い構想で、説得力のある内容である。

先行研究の一例に柳田國男の「動物援助」を取り上げているが、狐狸の化かし合いや動物憑依の事例は全国に数多くあり、また、さまざまに研究されている。今後、伝承研究に限らず、心理学や精神医学などの研究にも注目しながら、さらに実地検証を重ね、研究を深化させていきたい。

優秀賞

「「あくねの ななの 不思議なおかし」～阿久根の七不思議を調べて～」

鹿児島県立鶴翔高等学校

郷土芸能同好会

衰退する地域の現状を、何とか盛り上げるためにも、「阿久根七奇」の伝承をもとに菓子作りへと結びつける発想はユニークで面白い。そのために現地調査をし、伝説の成り立ちや実態を確認しながら、菓子の名称や製法、外形に生かすという工夫は、地域の文化遺産を地域活性へと繋げる試みであり、町のお菓子屋さんとも協力して、ぜひとも実現にこぎつけて欲しい。

伝説を「町おこし」に利用する試みはこれまでも各地で行われているので、他の地域の事例も調べ、それらの参考にできる点を取り入れながら、阿久根の特徴や独自性を強くアッピールできるよう、いっそう研究を深めてもらいたい。

佳作

「高尾山の天狗伝説」

東京・共立女子第二高等学校／神奈川・桐蔭学園高等学校

高尾研究会

高尾山の天狗について調べる前に、研究書を通して天狗の歴史やイメージなどを事前に調べてから、高尾山に登り、薬王院の僧から天狗について、山との関係からのレクチャーを受ける。それらを通して天狗とは何かについて、改めて考え学んだことをまとめるという構成で、民話のフィールド研究の模範といえる内容といえる。

妖怪怪異のメジャーである「天狗」については、これまで多くの著述がある。その意味では、個性的で独自性を研究で示すのは難しい。本研究は概説的な内容としては問題ないが、オリジナリティーや新味を提示するといった面からすると物足りない。ここから独自の天狗研究に向けて十分な策略を練る必要があるかもしれない。

佳作

「衛門三郎伝説」

愛媛県立東温高等学校

郷土芸能部

四国八十八ヶ所巡りは弘法大師と「同行二人」とされるが、その始まりが弘法大師を邪慳（じゃけん）にした衛門（えもん）三郎が、自分の行いを悔いて大師を追いかけたことからはじまるという伝説は、地元以外ではあまり知られてはいないだろう。その愛媛県松山市久谷の「衛門三郎伝説」について、伝説に関連する寺社や旧跡、遺物等を訪ねながら、改めて四国八十八か所巡りのある地域を見直し、伝説研究の意味を理解したという事例報告である。内外の遍路さんにインタヴューするなどして、四国遍路の意義を確認したという感想は貴重である。ただ、衛門三郎伝説の始まりについてと同時に、現在に至る伝説の成長についても、ぜひとも明らかにして欲しかった。それは四国遍路の現代的意義にも関わる重要な視点でもあるからである。

■個人の部

最優秀賞

「「鬼」考～今昔物語集と民話における～」

東京・世田谷学園高等学校

大和田　一稀

本作品は、今昔物語集や昔話などに登場する鬼について、それぞれの説話の鬼の属性を分析し、それを社会的階層の反映および寓意といった見方から解釈する。鬼を妖怪や怪異における異界の存在のモノとするのではなく、現実社会の支配関係や制度面からとらえる発想はユニークである。研究の方法にいくぶん荒削りな部分もあるが、その点を説話の背景をなす歴史社会に対する確かな理解や認識がカバーしている。鬼マニアの歴史社会学的立場からの意欲的でハイレベルな研究と評価したい。

ただ、本研究にも取り上げられている用語の「まつろわぬ民」としての鬼の側面への踏み込みがいくぶん弱い印象を受けた。歴史的な史料や神話伝説を通して、その人々の実態を明らかにしていきたい。同時に「土蜘蛛（つちぐも）」と呼ばれ、芸能や図像などに登場する、それらの分析を踏まえ、いかに忌避され差別されてきたかの実態の究明を期待したい。

優秀賞

「河口湖天上山に伝わる『カチカチ山伝説』の真相
～カチカチ山伝説の発祥地は本当に天上山なのか?～」
山梨県立吉田高等学校
廣瀬　香奈

太宰治の戦時中の作品『お伽草子』に描かれた「カチカチ山」の舞台は天上山であるが、これは創作であるからで、普通には昔話は特定の地域に関るものではない、といった原則論を確認する。というのも、この執筆者も最後に「天上山カチカチ山伝説の発祥地という訳ではなく、太宰治の作品の舞台である」と述べているからである。

ところで、この結論は、この作品の評価とはあまり関係しない。この作品は、文学作品を真に楽しみながら真面目に作品の舞台を追究し、かつ、その研究をカラフルにみごとにビジュアル化したパンフレットを作り上げたことに尽きる。ここまで読む人を意識しサービスするのは、何か本物の太宰の読者へのサービス精神に通じるものがあって、心温かくなった。

優秀賞

「澤様と人々の思い」
愛知県立杏和高等学校
木村　心優

この作品は、今から二百年前に、愛知県西北部の水害常習地克服のために献身の活躍を成し遂げ、ついに神に祭られた澤園兵衛の偉業をたたえたレポートである。著者は小学校四年生の時にこの人物を知り、現在まで長い時間をかけて資料を収集し、また現在唯一行なわれている須ヶ谷地区の「澤まつり」を取材し、インタヴューを交えるなど、さまざまな角度から人物の功績を顕彰してきた。

ただ、澤代官の偉業についての客観的な記述について、これまでの記録資料に基づくだけでなく、自分なりの視点を加味して再構成した形の成果の提示を工夫することも必要であろう。現在はかつてと比べ大きく農業が後退している中で、祭や澤代官が地域の住民にどのように受け入れられているかについて、一族の動向や祭に関る中心的な人物だけでなく、広く地域住民の意識を反映させた形の追究も期待したい。

佳作

「六合物語～これを語りて柳田國男を戦慄せしめよ～」
高崎市立高崎経済大学附属高等学校
小杉　恒太

群馬県北西部の山あいの集落、六合（くに）地区の伝承民話を、サブタイトルにあるように『遠野物語』に匹敵するものとして喧伝（けんでん）、普及させようとする志は、純粋で歓迎すべきものである。本研究はそのための第一歩と言えるかも知れない。しかし、志はよしとしても実態が伴わないのでは寂しすぎる。そのためには六合地区の地域的、生活的環境の反映した独自の昔話をもっと発掘して、その特性を生かした説明や紹介を心がけたい。

巻末に示された序文や用例は、『遠野物語』を模倣して作成したものといえるが、模倣はいくら完璧であっても二番目以上にはなれない。単なる模倣ではなく、六合地区独自のものから出発した試みの工夫をぜひとも求めたい。

佳作

「箱根における九頭龍伝説」
神奈川・鎌倉女子大学高等部
石田　瑠奈

九頭龍伝説の解明のために、実地を訪ねるフィールドワークを重ね、実感実証に基づく成果を示した報告である。実際に自分の足で歩き、その環境を体で感じ取ることが伝承研究の基本である。それをもとに、さらには他と比較対照することで、よりよくその特性を理解し報告することができるはずである。

全体を通して、現地レポートといった内容であるが、続いて、万巻上人のことや、九頭龍がどうして神社や寺院とも関係するのか、といった文献資料の研究にも手を広げ、歴史的な展開についても調べていきたい。その結果、「九頭龍とは何か」といった大きな問題に迫っていくことができるはずである。

優秀賞

妖怪「地域興し」
～山城の妖怪を活かした観光地づくり～

徳島県立池田高等学校
探究科
（山﨑愛悟、北原雅隆、多田遼平、爲實拓也、宮田翼）

応募の動機

私たちは昨年度の１年間、地元山城の妖怪伝説についてフィールドワークや文献調査を行い、研究を進めました。その中で妖怪文化を語り継ぐ人材が不足していることや山城の妖怪伝説の認知度が低いことがわかりました。そこで私たちが研究で学んだことをまとめ、少しでも多くの人に山城の妖怪について知ってもらえればと考え、応募に至りました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

徳島県三好市山城町は全国でも類を見ない、多くの妖怪伝説が残されている地域で、全国的にも有名な「児啼爺」の伝承が生まれた地でもあります。さらに水木しげるさんが会長をしていた世界妖怪協会から岩手県遠野市、鳥取県境港市とともに「後世に遺したい怪遺産」として認定されています。山城の妖怪伝説は、険しい自然の中で暮らす人々が危険から身を守るための知恵や戒めとして代々語り続けてきたもので、現在も山城の人々の暮らしの中に生き続けており、地元の方が妖怪伝説を地域の文化として大切に守っていることが、山城にしかない魅力を伝えていく観光地づくりにつながっています。

妖怪採集の様子

研究は文献調査、市役所の方や大学の先生へのインタビュー、そして実際に山城町へ出向き、フィールドワークや妖怪イベントに参加することで山城の妖怪が観光資源として、どのような実態をもっているのかを調べることにしました。まずは妖怪採集に参加しました。妖怪採集とは山城の豊かな自然をめぐりながら妖怪がいそうな場所を探すというユニークなものです。参加していた５組の家族にインタビューをしてみると、「自然の中を歩くことで妖怪に現実味を感じた」「地元の人が手作りした妖怪のモニュメントは自然に溶け込んでいて味がある」という意見がありました。また、回答者全員が妖怪イベントにまた参加したいと答えていることから、三好市の新たな体験型観光の一つとして、大きな可能性を感じました。また妖怪まつりでは、妖怪大行列や妖怪バンド、怪フォーラムなどの催し物のほかにも岩手県や鳥取県を含めた伝統芸能の披露や物産の販売があり、想像以上に人が多く、盛り上がっていました。妖怪アニメの上映、塗り絵コーナーの設置など親子連れが楽しめるような工夫もされていました。観光客へのアンケート調査の結果ではイベントや妖怪屋敷・妖怪村などの満足度は高いものの、イベントに参加していた人は県内・四国内の人が多数で、宿泊を伴うものではなかったため観光資源として大きな経済効果をあげていないこと、つまり、全国（海外）へのPR不足が課題として明らかになりました。

妖怪まつりの様子

また市役所の方や大学の先生へのインタビューから、妖怪伝承や文化の担い手、後継者が不足していることも課題だと聞きました。実際に私たちの周りでも、山城の妖怪や地元の取り組みをあまり知らない人が多く、非常に残念だと感じます。山城の妖怪での地域興しの魅力は、住民主体の伝承文化であり、活動であるということです。地域の方々が守ってこられたこの文化を継承していくためにも、同世代の若者たちに地元の良さ、山城の妖怪の魅力をもっと知ってもらいたいと強く思うようになりました。そして私たち自身もこの研究で終わりにするのではなく、地元に愛情を持ち続け、魅力ある地域にしていくためにも活動を続けていきたいと思います。

優秀賞

白文鳥の町弥富を再び
～弥富文鳥文化復活を目指して～

愛知県立佐屋高等学校
文鳥プロジェクト
（福澤真歩、鈴木胡春、大家光剣、生川結依子、福重綾花）

応募の動機

佐屋高校文鳥プロジェクトでは、弥富市発祥の白文鳥文化の保存と発信を目指して活動を行っています。これまで私たちは、弥富文鳥文化を様々な方法で発信してきましたが、文鳥のイメージ調査では、「思い浮かばない」などの回答もあり、継続した発信の必要性を感じています。そこで、より多くの人に文鳥文化を知ってもらうため、応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

真っ白な羽と真っ赤なくちばしが魅力の白文鳥は、佐屋高校のある愛西市の隣、弥富市又八地区で誕生しました。弥富に文鳥が伝わったのは、江戸時代であるといわれています。その中から突然変異により、真っ白な羽を持つ個体が生まれました。明治の初め白文鳥という品種として固定され、農家の副業として弥富の白文鳥の繁殖が広まりました。今でも又八地区にある神社には「白文鳥発祥の地」の記念碑、電話ボックスには白文鳥のモニュメント、白文鳥にちなんで命名された「白鳥小学校」、文鳥をモチーフにした弥富市キャラクターなど、文鳥文化を示すものが多くあります。しかし、生産農家は残り２軒となってしまい、どちらの農家にも後継者がいません。そこで私たち佐屋高生が弥富文鳥文化を守る後継者となるべく、活動を行っています。

佐屋高校で誕生した白文鳥

弥富文鳥を守るために繁殖に取り組みたいと、文鳥農家の青木さんに相談したところ、昨年７月に文鳥を寄付していただきました。そして、農家さんや中日本愛鳥会の協力のもと、昨年度は合計32羽の佐屋高産文鳥を誕生させることができました。また、雛を手乗りとし、地域の方に譲り渡しました。受け取った方々はとても笑顔で、文鳥の魅力を地域へ広げる第一歩となりました。

やとみ春まつりへの参加

文鳥文化の発信にも力を入れています。今年はテレビやラジオ、新聞、雑誌と様々なメディアに取り上げていただいた他、ＳＮＳをとおして広く活動を知っていただくことができました。また弥富市長を訪ねて思いを伝えたところ、弥富市の文鳥キャラクターの使用許可をいただきました。その他にも地域のイベント等をとおして文鳥文化の発信を行っています。しかし、地元の方を対象にアンケートを行った結果、弥富文鳥を知らない方が27％という結果となりました。文鳥文化を地域に根付かせるためには、地元の方に知ってもらう必要があります。そこで、弥富市歴史民俗資料館での企画展の開催に向けて弥富市と連携して準備をしてきました。文鳥のコーナーには、私たちがまとめた文鳥の歴史と、活動紹介が展示されました。また、カレーハウスＣｏＣｏ壱番屋と連携して、弥富市キャラクターの白文鳥をモチーフにした温泉卵がかわいい「文ちゃんカレーうどん」を商品化しました。７月には完成お披露目会を開催し、多くの方に来ていただきました。また現在、地元洋菓子店と協力して「文鳥の町弥富」の銘菓となる洋菓子の開発をしています。現在４回の企画会議等を行い、今年度中の商品化を目指しています。そして、観光資源としての文鳥の魅力もＰＲし、地域活性化につなげていきたいです。

学校活動部門選評

國學院大學教授　高橋　大助

学校活動部門の審査にあたって、私は、次の二つの観点から審査しています。一つは、地域の伝承文化から学び得たものはなんであるか、それがはっきりとしているか。いま一つは、きちんと生徒自身による探究として行われ、学校活動の名に相応しいか。この両方を満たしたものを選んでいます。中には、地域を基盤とした学校活動としてはレベルの高いものでありながら、それが地域の伝承文化に学んでいるとはいえず、選に漏れるものもあります。他の観点から選ぶことになれば、また、違った結果となるでしょうが、コンテストの趣旨に即しての判断とご理解ください。

さて、入選の二作品に共通するのは、地域の伝承文化に学ぶことを通じて、地域に埋蔵されていた文化的資源を生徒たちが掘りあてていることです。

愛知県立佐屋高等学校「文鳥プロジェクト」は、昭和50年をピークに衰退した、地元・弥富市での白文鳥文化を再検討しました。興味深いのは、生徒さんたちが、実際に文鳥の飼育を行い「後継者」を志すに至ったことです。伝承文化に学び、学んだことを伝える「後継者」になるというのは、まさに生き方に関わることであり、その意味で、この学びがキャリア教育としても機能していることを示しています。

一方、徳島県立池田高等学校の場合は、地域の伝承としての妖怪、その資源としての価値を再評価することを目指しました。市川寛也氏を始めとした専門家の力を借りながら、観光資源としての妖怪に取り組み、問題点をあぶりだすことに成功しました。滞在型の観光客を増やすための「妖怪村体験ツアー」の提案はもとより、祭りなどの若い担い手が育っている地域との交流や、地域の高齢者に学びながら彼らとともに自然景観を守る環境ボランティア活動の企画などは、期せずして、アートの世界で近年トレンドとなっている出来事と軌を一にしています。この活動に高校生が自ら主体的に取り組んだことを頼もしく思います。

両者とも、社会に開かれてある学びの方向性を示すものである点でも高く評価されるべきものでした。

学校活動部門選評

國學院大學准教授　飯倉　義之

学校活動部門は少しく危ういと感じている。今年度目立ったのは、地域に関係のない個人の部活動の記録や、地域との関連の薄い学校活動の記録の応募だった。本コンテストに学校活動部門が設置されている理由は何かをきちんと広報し、応募者に理解される働きかけなくてはならない。それが選者として痛感した今年度の反省である。

地域文化研究部門（個人・団体）および地域民話研究部門（個人・団体）と比較すると、一見したところ学校活動部門には「地域」と「研究」を重んじていないように感じられてしまう、のかもしれない。しかし本コンテストは「地域の伝承文化に学ぶ」を謳うものである。地域の文化の学習と理解をまずは前提とし、その成果を地域と関わる具体的な活動＝実践に活かそうとするというアクティブな試みを、少しく踏み込んでいえばその活動＝実践の成功・失敗に関わらず評価したい、というのが学校活動部門の存在意義だと考えている。今回の優秀賞に推した二団体も、そうしたアクティブな試みを評価したものである。

徳島県立池田高等学校探究科「妖怪『地域興し』～山城の妖怪を活かした観光地づくり～」は、池田市内の山城地区が水木しげるのまんが作品『ゲゲゲの鬼太郎』の主要キャラクターとなっている妖怪・子泣き爺の元となった伝承が存在していた地域であることを用いて地域興し活動をしていることに注目して、観光客へのアンケート、講演・シンポジウムに招いた講師へのインタビューを行い、今後の地域興しの方向性を提言している点を優秀賞にふさわしいと評価した。

愛知県立佐屋高等学校文鳥プロジェクト「白文鳥の町弥富を再び～弥富文鳥文化復活を目指して～」は、かつて白文鳥という愛玩鳥の生育・出荷で栄えた弥富独自の文鳥文化を伝承・広報すべく、生徒自身による白文鳥の生育と白文鳥文化の積極的な広報を行っている点を優秀賞にふさわしいと評価した。

二校の今後の課題を述べるとすれば、徳島県立池田高等学校探究科はどのような具体的な活動＝実践を作り上げられるか、愛知県立佐屋高等学校文鳥プロジェクトはこの活動＝実践の継続と発展を計画できるか、ではないかと思う。二校はもちろんこの課題について考えていることと思う。来年度の応募校は、二校を参考にしてほしいと切に感じる。

第 14 回　「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト
受賞者一覧

地域文化研究部門【団体】

賞　名	高　校　名	グループ名	作　品　名
最優秀賞	富山県立砺波高等学校	2年文系・歴史民俗班	宮地集落の民俗誌　－石川県鳳珠郡能登町　春蘭の里－
優秀賞	沖縄県立宮古総合実業高等学校	生活福祉科	広めよう！みゃーくふっと先人の郷土文化
優秀賞	愛知県立杏和高等学校	地域研究グループ	平成最後の“祖父江の虫送り”　～杏和高校　繋がりを求めて～
佳作	静岡県立沼津城北高等学校	情報メディア部	2020 東京大会に向けて全国・全世界に発信したい三島－沼津間 6.6km の道
佳作	愛知県立杏和高等学校	旧２年３組お雑煮調べ隊	自分たちの足元をみつめる　～我が家のお雑煮から“今”を考える～
入選	岐阜県立益田清風高等学校	地域研究	ふるさとの宝物探し
入選	東京・香蘭女学校高等科	伊勢研修	伊勢神宮にまつわることについて

地域文化研究部門【個人】

賞　名	高　校　名	応　募　者　名		作　品　名
最優秀賞	愛知県立杏和高等学校	３年	飯　田　真　世	漬物で語る～『知らない』と『忘れる』に立ち向かう人々～
優秀賞	東京・広尾学園高等学校	２年	荒　殿　一　花	福井県敦賀市の伝統行事、「敦賀まつり」について
優秀賞	愛媛・済美平成中等教育学校	４年	武　井　千　夏	変化していく音頭　～音頭から始まる流行音楽のかたち～
佳作	東京・渋谷教育学園渋谷高等学校	２年	弓　場　鈴　響	関西弁は日本語習得の良いツールとなりえるのか～外国人の第二言語習得からみた関西弁～
佳作	神奈川県立横浜国際高等学校	３年	矢　川　優　里	報恩の民『台湾少年工』は日本統治時代における犠牲者でしかないのか
入選	徳島・徳島文理高等学校	２年	江　川　美　結	蜂須賀家政の墓を探る
入選	鹿児島県立屋久島高等学校	３年	福　元　美　那	屋久島の郷土料理を伝えるよりよい方法を探る
入選	青森・五所川原第一高等学校	１年	古　川　弥　音	伝承されていく津軽三味線
入選	青森・五所川原第一高等学校	１年	北　畠　來　夏	海童神社について
入選	青森・五所川原第一高等学校	１年	工　藤　千　愛	一本タモ

地域民話研究部門【団体】

賞　名	高　校　名	グループ名	作　品　名
優秀賞	愛媛県立西条高等学校	地域・歴史研究部	おたちきさん　～なぜ、五百年以上祀られ続けてきたのか？～
優秀賞	群馬・高崎商科大学附属高等学校	社会部特選・特進男子	民間に根付く妖狐妖狸伝
優秀賞	鹿児島県立鶴翔高等学校	郷土芸能同好会	「あくねの なな 不思議なおかし」　～阿久根の七不思議を調べて～
佳作	東京・共立女子第二高等学校 / 神奈川・桐蔭学園高等学校	高尾研究会	高尾山の天狗伝説
佳作	愛媛県立東温高等学校	郷土芸能部	衛門三郎伝説
入選	栃木県立佐野高等学校	佐野地域伝承研究班	佐野の伝承についての調査及び英訳活動
入選	青森・五所川原第一高等学校	２年６組Ｇチーム	岩木山と鬼神伝説

地域民話研究部門【個人】

賞　名	高　校　名	応　募　者　名		作　品　名
最優秀賞	東京・世田谷学園高等学校	２年	大和田　一　稀	「鬼」考　～今昔物語集と民話における～
優秀賞	山梨県立吉田高等学校	３年	廣　瀬　香　奈	河口湖天上山に伝わる『カチカチ山伝説』の真相　～カチカチ山伝説の発祥地は本当に天上山なのか？～
優秀賞	愛知県立杏和高等学校	２年	木　村　心　優	澤様と人々の思い
佳作	高崎市立高崎経済大学附属高等学校	３年	小　杉　恒　太	六合物語　～これを語りて柳田國男を戦慄せしめよ～
佳作	神奈川・鎌倉女子大学高等部	２年	石　田　瑠　奈	箱根における九頭龍伝説
入選	福岡県立修猷館高等学校	２年	谷　口　生貴斗	伊能忠敬の腰掛け石伝承について
入選	青森・五所川原第一高等学校	２年	今　井　真　琴	七夕のはじまり

学校活動部門

賞　名	高　校　名	グループ名	作　品　名
優秀賞	徳島県立池田高等学校	探究科	妖怪「地域興し」　～山城の妖怪を活かした観光地づくり～
優秀賞	愛知県立佐屋高等学校	文鳥プロジェクト	白文鳥の町弥富を再び～弥富文鳥文化復活を目指して～

折口信夫賞

高　校　名	グループ名	作　品　名
富山県立砺波高等学校	２年文系・歴史民俗班	宮地集落の民俗誌　－石川県鳳珠郡能登町　春蘭の里－